

残存品、または元寇撃滅の際の戦利品と稱せらるゝ珍品が、土中より發掘されたのを見
ると、平氏、大内氏の遺物が、今日猶ほ好古家の寶藏に保存されて居る話は決して不思
議ではありませんまい。其證據には現に今でも山口方面の寺院に大内氏の遺品と見られる
名物が、所々に保存してあるではありませんか。

これは大昔からの事ではあるが、殊更戦國時代に於て、大に内外人の智者を驚かしたの
は、土木建築の仕事である。今日の如く便利なる運搬機械のなき時代に於て、巨大なる
木石類を遠地にまた高處にたやすく運び、城櫓また樓の難工事を巧に竣成し、別して大
木巨石を自在に使つてある城閣を見ると、實に驚歎するばかりである。一體どうしてこ
んな大きな石や木を誰がこの高い所まで持つて登つたか、今日の人の疑をのこしてゐる
所ですが、これは圓木道、生竹道といつて、大きな丸木を伐つて、それをずつと並べて
繋いで山の上から、谷でも坂でも構はず、その上に木材、石材を滑べらしたり轉がした
りして運び卸すのです。それから生竹道といふのは生竹です。これも枯れた竹では折れ
てしまふから、枯れてゐない、なまの竹を道に敷き詰めて置くと、竹と竹とが互に滑り
合つて、それが滑る度に、上に載せたものが下まで滑つて行く、さういふものを運送の

器械に使つて、重い物を山の中から取出したといふことが、書いてありまするが、また
重い物を引くには、ロクロや、カグラサンや、シヤチを使つて、引上げました。また重
い石は、水の底に釣下げて、運んだのであります。防長に於てもこの工事の手際が残さ
れて居ります。

それから河川の治水工事ですが、これは谷川なんぞに、出来る限り舟筏を通したいとい
ふので、むしろ戦國時代にはこれに力を盡し運搬の便を開いてゐました。昔は山の奥か
ら川舟若くは筏を組んで流すことが出来たけれども、後世は逐々出来ぬ様になつた。そ
れで後年に折々通船のため灌漑に浚渫疏水の工事をやつたんです。防長でも岩國川、佐
波川、樫野川、厚東川、厚狭川、吉田川、栗野川、阿武川は、いづれも舟筏の便利があ
りましたが、今日では精妙なる運送器械がありますから、河川の舟筏も自然と衰へてし
まゐりました。

戦國時代に頗る面白いことは、防長の昔の海軍人が、車輪を船に使掛けて、船を行進さ
せたことである。これは當時の戦争に用ゐて善く働き、餘程役に立つたものである。そ
の外海上のことには、案外聞くべき逸話は多いのである。それから建築用の木材でも石

材でも、長く貯藏して置くには、水中に沈めて置くのが宜しい。これも戦國時代の工夫であつた。これは後世西洋人が、此話を聞いて非常に感服しました。むかし江戸深川の鶴歩町に毛利家の下屋敷があつて、建築材を貯へられ、中に大きな池があつて、水中に巨大の木材が沈めてありました。その木材水藏の評判は、江戸時代の賞讃を博したものでした。右の重量の巨木大石を高所に引上げた、竹道とカグラサンの珍話、また木材石材を水中に、貯藏した好話は、いづれもこの道に知識深き、西洋の専門技術家を驚かしました。眞に工人の一考を費すべき好材料である。

人間の目も耳も手も足も、その數は昔も今も同じである。然るに今の人の容易に造る物が、昔の人には出来なかつた。それかと思へば、昔の人が上手に拵へたことが、今の人には逆も出来ぬものがある。精巧なる製造の機械や、物理化學に屬する細微の發明は、どうでありますか、現に工藝技術の上に、非常の速度を以て、立派に作動する最良の機械は、到底昔の人には出来ようとは思はれないが、昔の人の残した繪畫、彫刻、陶工、建築の如きは、却て今の人の考へ及ばぬ優秀の作品が澤山残されて居ります。人間の智能は、左に伸びれば右に縮み、上がつたり下がつたり、左右上下に出入伸縮する状態

は、實に猿猴の手が左右相互に伸縮する様なものである。これ等の現象は、防長に残された、舊藏工藝品の上に於て能く見られるのであります。

いつも同感であるが、特に戦國時代に於て、注意探求して居るのは、人物の資源である。勝れたる人物を澤山に養成した國は、戦争に強いのみならず、何事にも超越して安泰であるが、萬一人物に乏しい、愚頓の背比べ、平凡の人材が多かつたならば、政治も、學問も、戦争も、産業も、凡べて劣等にして、他國と對立することは出来ぬ。金力よりも、兵力よりも、競争場裏にありて、結局大勝利を贏得るは、つまり人物の強力である。われ等の畏敬すべき人物とは、武勇の外に深く精神修養に、また心膽の鍛錬に絶大の効果ある人でなくてはならぬ、緬羊群の前に猛獅が立つ様なものだ。羊は獅子の面貌を見れば、戦ふどころか、五體が萎縮して動くことが出来ぬ様になつて卒倒します。強い人が弱い人に對すると、先づこの様な景状である。

いくら金があつても、上手に使ふのは、偉い人の智力でなくては出来ぬ。軍を爲るも勝利を得るのは、偉い人の武力である。されどどれほど金があろうとも、大部隊の勇兵があつても、偉い人がなければ、却て弱國愚敵のために自國はもろくも亡ぼされるであら

う。偉い人物を要するのは、戦時のみでない、洵に平時に於てこそ、豫め最良人物の資源を採取しなくてはならぬ。吾人は切に天下國家のために、神とも思はれる善美なる偉人の相續いて出現せんことを禱ります。

庚篇 防長に於ける毛利氏の政道行爲

變り行く時代は、織田氏豊臣氏の脚色多き局面を經過して、遂に徳川幕府を見るに至つた。毛利氏は慶長五年關原の變亂に、滅封の已むなき厄運に會したれば、居所を大坂の木津より、周防の山口に移し、翌六年長門の萩に築城し、同九年竣工したので、早速城内に引越すことゝなつた。その間の設計工事は、日夜兼行して、頗る急忙のことであつた。

以前八ヶ國を領有した毛利氏が、急に防長二ヶ國に減少したので、非常に困難を感じた。それは従來毛利氏の恩顧を蒙り、一身を以て主君に報ゆると云ふ英雄が各所に散在して居たものが、いづれも舊情忘れ難く、相變らず懸命に忠義を盡したいと申して續々防長に來住するので、案外に城下を填充したからである。

これ等の武人を扶養し、領民を安堵せしむるには、餘程爲政者の苦心努力を拂つたことであらう。藩に於ては今後天下の氣運が如何に轉回するか、防長人は何と覺悟すれば宜

しいかと心配し、又世間からも、防長人は立派に存立が出来るのか、何を爲るであろうかと、靜に防長の舉動を窺はれていた。斯様な次第で慶長年間防長當局の爲政者は、固より、智能に勝れた重要人物であつたが、人も知らぬ目にも見えぬ様な骨の折れた心配が多かつたのであります。

防長の住民が、悉く生活上に安定を得る様にと、要路者は頻に心配をしたのみならず、更に重大な問題は、國家が一朝非常時變に觸れることがあるとしたならば、如何に處置すれば宜しいか、これに當るには、豫め深遠の精慮を以て、外禍の侵襲を禦ぎ、衆心一致、能く他方よりの侮蔑を防止して、防長の名譽を揚ぐる様に、専ら強大の防衛力を有する一國家を造るべしと云ふのであつた。

慶長初年長州藩の爲政者の苦心は、容易ならぬ骨の折れたこととて、幕府に對する表向の掛合には、吉川廣家が當つたが、内政向諸方面の施設は、概ね益田元祥入道牛庵の、努力で出来たものと申さねばなりません。毛利輝元は關原事變の後、隱居して家督を長男秀就に譲り、隱居して宗瑞と號し、政治の後見を致して居りました。尋て三井元信、藏田元連をして、防長二州の檢地檢石をなさしめ、とにかく今迄八ヶ國領土に居りし特志

の武人等、舊誼を忘れ兼ね、いづれも悉く二州に隨住することゝなりしたため、第一に考慮を運らしたのは、藩民に對する食糧問題である。急速に着手を思立つたのが、海面埋立。田地の開作でありました。これは後年に至るまで、長期間の繼續事業でしたが、その埋立開作せられた新田は南面の瀬戸内海の沿岸で、其施設宜しきを得て、吉敷郡、佐波郡、厚狹郡、熊毛郡、玖珂郡等、いづれも米作に好適せる良田となり、食糧製産に、漸次効果を奏してからは、更に一般の農作、造林、漁業にまで研究獎勵の成績を見ることとなつた。それからは城下その外にある、河川の改修を爲し、耕地の灌漑に利し洪水の被害を防ぎ、又水量の多き川筋には、通船の便を謀ることとした。其上今後如何なる非常事變が起るかも知れぬから、かねて經國濟民のために必要なる資源は十分開發して置かねばならぬと、深く慮つて防長人の智能を需むるのは勿論であるが、若し藩外の人にても、特別に貴重な天才を有するものあらば、必禮を厚くして雇聘し懇に産業道に全力を盡させることゝした。彼の鑛山開發や、牛庵堤、長澤堤、常盤堤なども、十分當時の苦心を感賞せねばならぬ遺蹟であります。

さて元和寛永の間に於て、毛利秀元、益田牛庵が公命を受け、長州藩の財政整理に着手

し、非常手當のために用心金を積立てた。金であれば大判、小判、砂金、延金、小額の通用金、金の釜、金の茶碗、金の武器、苟も黄金を以て造られた物は悉く金庫に貯蔵することゝした。これが年々歳々増殖して巨大の數量となり、その後寶曆元年御撫育方を興された時の基本資金となつたのであります。

毛利氏所領防長二州の檢地をして、五十餘萬石となつたから、益田牛庵は幕廳に出仕して、本多正純にこの趣を告げたところ正純から『それは結構であるが、幕府は今後祿高に據つて税金また手傳金その外に、新しき附加税をも徴する場合多かるべきに付、幾割(三割減ならん)か減されたがよろしからう』との注意があつたから、更に三十六萬石餘と改めて届出てそこで歴代の家祿は三十六萬石餘で相續せらるゝことゝなつた。當時幕府は諸侯の階級を三段に定め、四十萬石以上を上級、十萬石より四十萬石未満を中級、十萬石未満を凡べて下級として居つたから五十萬石以上なれば、祿高と俱に、格式が宜くなり、公席の待遇は上ることにはなるけれども、五十萬石以上の實祿を以て、三十六萬石餘の届出を許可されたのは、全く正純の取計に依るもので、牛庵も大に面目を得て藩主に復命が出来て、いづれも安堵した。牛庵は永祿元年に生れ、寛永十七年に、八十

三歳で歿しましたから、慶長五年關原事變の時は、四十三歳の分別盛りの、智者と呼ばれた大名物男でありました。

毛利氏は神別系圖の舊家で、歴世多數の名流輩出し、夙に大江姓を以て、文學兵法等に名譽を傳へたが、元就は、稀代の天質を抱き、智仁勇に卓越した偉人であるから、毛利氏は元就を中興の大祖として、何事も元就の遺訓に従ひ、藩治の軌範を作ることゝなつた。後ち明治に至り、朝廷は元就の勤王の忠義、並に國家に竭くせる勳勞を嘉みせられ、廟社を別格官幣社に進め、位階も正一位を追贈せられた。元就は明應六年に生れ、元龜二年七十五歳で逝去されました。元就の時代は、戰爭紛亂の世であつたから、實に戰爭が多かつた。元就一代中に大小の戰爭は、永正十四年より永祿十二年まで、五十三年間に二百餘度あつたと云ふことで、その間の軍記物語は、特に感佩奮激して、謹聽すべきものが澤山あります。

その後毛利氏の系脈も分派して支藩が出来て、長府、徳山、清末、岩國の各家を見るに至つたのも、凡べて元就の遺訓に従ひ、どこまでも毛利氏の名譽のもとに互に相助け防長領土の基礎を安固ならしむるの本願に外ならなかつたのであります。石州降露坂の

苦戦の際に渡邊太郎左衛門通が元就の身替りと爲つて奮闘忠死した景状は、恰もむかし村上義光が吉野の一の木戸で、護良親王の身替りとして勇戦憤死した働き振りと同様で、降露坂にはその忠死を賞せんと、往年立派な石碑を建てられ、大文章が彫付けられてある筈です。

何と申しても、永久不朽の美談は、束矢の教訓である。元就が隆元、元春、隆景の三子を、膝下に呼寄せ、爰に數本の矢を取出だし、矢を折り矢を束ねて、一同に向ひ、一致協力し、兄弟親戚より主従より領民に至るまで、悉く和平親善の至誠を竭し、以て國家安定の根幹たることを専ら承知すべき様にと、懇切に教訓されたことは、國を治むる至大の寶語であります。近世の宿儒が、諸英雄を品評せるうちに、元就を指して全人なりと論じてゐるのは、如何にも至言であると存じます。

嚴島の陶征伐その外義戦と思はるる合戦は少くないが、敵が一旦降参したら決して無法な取扱はしない。必降参人を深切に待遇し改心し悦服して來た者には、もとの敵にも厚祿を遣つて、その家を永久に扶持して遣る。それは尼子氏の遺族並に尼子の重臣其他を高祿優遇されたのが、後日廢藩の際まで繁昌して居り、この外諸方の敵方より降参して

毛利氏に臣従隸屬したものが多かつたけれど、凡べて相當のもてなしを受けて藩士たる身分を持つてゐた。

元就の時には、領土も山陽、山陰、四國、九州に跨り、十三箇國と申されたが、輝元の時に、秀古より受領したのは、安藝、周防、長門、備後、出雲、伯耆、隱岐、石見の八ヶ箇國であつた。然るに關原事變後は、周防長門の二箇國に減縮された。さて十三州が八州となり、また二州と爲つたのは、如何にも遺憾であつたが、防長人が元就束矢の名訓を嚴守し、防長を以て安住すべき大切な國柄と心得、一致結束して、上下協力の功績を彰すに至つたのは、全く元就以來の訓練修養の然らしむるところで、その効果は他日、明治維新の大業に於て現はされたのであります。

武士道の訓練に依り、日本精神を、積極的に現されたるものは、至誠天地を動かし正に鬼神を泣かしむるものがある。天正十年吉川氏の鳥取籠城の苦節の如きは、頗る感歎餘りある次第であるが、更に驚歎すべきは備中高松に於ける清水長左衛門宗治の籠城である。織田信長より中國攻として豊臣秀吉に全軍の總督を申付け、秀吉が宗治に懇説開城を勧めたるも一向に承服する意思がないそこで黒田如水、蜂須賀蓬庵兩人を特選して強

硬に説諭したれども、頼と之に従はず、却て兩人は宗治の雄辯の烟に捲かれてすごく戻つて來たのである。そこで秀吉は如水と蓬庵を再び差遣して百方論議の後ち清水より切腹開城と決したときに、宗治は『それでは僕の言ふことを聞いて呉れ、武士は後世に笑を残すやうなことがあつてはすまぬから、この城を枕として仆れる。僕が仆れたならばどうにでもしてくれ、その代り城兵はすべて助けて貰ひたい』と希望した。そこで兩人は何か特別の申出はないかといふと、いや外には何も無いが、出水のために一面湖水のやうになつてゐるから船を借してくれ、そこでいよく訣別の離盃を取交はすから、善い酒と肴を持つて來てくれ、それから腹を切るつもりだから、檢視の役人を頼む、下手な死方をするか、立派な切腹をするか、檢視の役人に見届けて貰ひたいといつたのである。そうして愈々話が極まると前の晩に、清水は髭を剃つて顔を綺麗にしたり、口ひげを毛拔でぬいて居ると、脇にゐた者が『貴方は明日切腹なさるのに、今更顔を立派にするなんて、そんな御苦勞なことは要るまいぢやないか、今すぐに死ぬる人が餘計なことではありませぬか』といふと宗治は『いやさうぢやない、僕が切腹した後には必ず此首を箱に盛つて、都にゐる信長の前に首實檢をするに違ひない、その時に餘り穢らしい顔を

をしてゐたら、如何にも不景氣の面相を見せることになるので甚だ面白くない譯であるから』といつて身仕舞を綺麗にした。時刻が來ると、周圍一面の水であつた水上に船を出した。兩方の高い處から、敵も味方も同一に見張つて居る。その真中で清水は酒盛を始め、靜に誓願寺の謠曲を謠つた。それから徐に酒を酌み交して檢視の武士の前で立派に腹を切つて死んだのです。宗治の此の意氣凜然實に忠節義理のために盡すといふ誠意の満ちたる敵前快死の最期を追憶しては、誰でも襟を正さずには居られまい。

又同じ年ですが、備中の冠山の城に林三郎左衛門重真といふ人がゐて、此人も敵に遮られてこゝから清水を助けに行くことが出來ず、やはり大敵に圍まれた。併しどうしてもこのまゝ降参することは出來ぬ。そこで部下の者共に言ひ渡して『お前達はこゝから皆退散して呉れ、僕は夫婦子供その外と共にこの城を守つて最期を遂げるつもりだ』といつて、重真は冠山の城で夫婦共自刃を遂げてしまつたのであります。その際自分の悴に向つて『お前だけは今こゝで死んで困る、お前は父の言ふことをよく聞いて、父の代りに清水の所に行つてこの事情を詳細に知らせて呉れ、又清水の爲に働いて呉れ』といふて、悴を宗治の所に遣つて自分は自刃したのであります。如何にも感服すべき好武

士ではありませぬか。

また同じ天正十年に一段痛快なる武勇談があります。それは草刈太郎左衛門重繼といふ人がありました。この人が毛利軍の部隊長で山陰道の伯州の方で合戦をしました。その時に伯州と因州の境に橋津といふ所がありますが、これは非常に要害の地で山陰道の因州方面の分堺を越えるやうな奥地から、川を流れ傳はつて来る筏舟等で送り出す物資は、皆橋津に集まるんです。その近所に馬の山といふ所があつて重繼は、その附近に陣取つて居つたのです。

そのうちに合戦が始まつた。この草刈は非常に強い人で到頭秀吉の軍隊を追捲くつた。今日よりいへば尊き聯隊旗たるべき秀吉の旗印の千成瓢箪を捻ぢ伏せてもぎ取つてしまつたのです。秀吉は方々で高名な戦を澤山やつたんですが、千成瓢箪を敵の爲にもぎ取られたことは、まだ一度もなかつたのですが、この千成瓢箪をもぎ取られたことを見ても、如何に激戦であつたか、察せらるる。思ふにそれで渡邊太郎左衛門、清水長左衛門、草刈太郎左衛門、林三郎左衛門の如き、武士の典型たるべき立派な大人物が、續々と出て來たといふのは畢竟元就の感化養成の盛徳の現はれて來たのに相違ありませぬ。

さてその後を受繼がれた嗣子隆元は早く逝去され、後を襲ひたのがその嗣子輝元である。輝元が天正十六年に皇室へ奉仕のため上洛されましたが、それは上洛日記といふものがありまして、非常な盛んなことでした。その時分は藝州に居られた譯ですが、その書いたものによると荷物を七十艘の船に満載したといふことでありますから、非常に結構な献上物を御土産物として澤山持つて行かれたこと、思はれます。それから後になつて關ヶ原一件があるのですが、運悪く慶長五年の九月十五日關西軍は不幸にも敗戦になつたのですから、己むを得ない。どうしても向ふのいふことを肯かなければならないこととなり、到頭領土を削減せられ、最初は山口に落着いて、それから萩の築城が慶長六年に始まり同九年にあらまし出來上つたので、入城せられました。その間毛利家の爲に懇誠を盡した忠義な人は澤山ありました。その代表的に節義の深かりしは、吉川廣家、益田元祥などで非常に善後策に骨を折つたものです。元祥後ち入道牛庵は、寛永十七年に八十三歳で亡くなりましたが、この人は専ら滅封以後の藩治のため、經濟政策に關しては、死力を以て働きました。尤も退隱後に多く働いたので、餘り人に知られないのですけれども、當時の毛利氏並に長藩のためには、尊敬すべき大切な人物でありました。

前にお話をした起請誓紙は、武家時代には何處でも上から下まで、少し廉ある仕事や、また何か約束を固める時には必ず起請誓紙を作つたものですが、益田の家には當時元就から遣はされた起請誓紙が儘に残つて居ることと承はつて居ります。

さて慶長六年になると山口方面、萩方面は整理すべき仕事がだん／＼忙しくなつたので、行政向、農制、經濟その他總てのことは、大内氏の舊制度を多く參酌するやうにして、土地の諸民を安堵させるやうに取入れることに極められたのです。その後出來た舊藩時代の法度箇條が澤山ありますが、さういふものに於ても職名その外の名前は、大内時代のものを襲用して定められたのがいくつもあります。

この時分陸は固より陸軍がありますけれども、瀬戸内海には舊式の海軍がありました、これが中々この時代には能く働いて、餘程役に立つたものであります。伊豫の河野、それから周防の方に移つて分れたのが、村上、浦等である。それから能島、來島、因島の三島流でその海軍戰術を専らその流技を用ひたやうですが、南北朝の軍の時また嚴島の合戦の時も河野、村上の海軍は能く働いたものですから、その者が皆毛利氏の方に移つて行つたので、後世の合武三島流と申した海軍砲術は即ちこれであります。

昔の船は何といつても帆を上げて風を待つて走つたのですけれども、戰國時代に誰の發明ですか、當時新進の知識として、車輪船と云ふものが出來て、軍船に車を附けて廻せば風がなくとも進んで行くことになりました。車輪陽船、車輪陰船といふ陰陽の二つに區別して、車輪陽船の方は前線に出て敵と戦をするもので、車輪陰船の方は陰ですから後方にゐて總ての戰鬪員を援けるだけの武器其の外の戰用物資を送る、即ち銃後の勤務をする船です。この車輪陰船、車輪陽船が當時用ひられて居つたのです。今日でも毛利氏や村上氏の書類には車輪船の圖が載つて居ります。

元寇討伐の時も、南北朝の合戦の時も、總てこの邊の人が出て働いたのでありますが、慶長六年から萩の城普請が始まりました。この城の出來る前に、豫め何處に作るといふことを願出なければならぬのです。それで三田尻にしたいとか、山口にしたいとか、いろいろのことがありましたらうが、結局萩でないと許されぬ。三田尻にも山口にも、舊來軍略上の關係よりして、幕府は許して呉れない。遂に一番北の外れの交通に不便なる萩ならば許可しようといふことになつて、遂に萩へ城を築いたのですが、元來この所は、椿村と稱して一面の港灣で、船舶の出入が盛んな所でありましたけれども、地

面が狭いものですから、今日萩の市街を成して居る所は、當時は皆鹵滲また水面を埋立てたものです。むかしこの萩の指月山には長門の探題を置かれ、鎌倉の頃に北條の一族が勤番して居りました。もともと外國船の警備の爲に設けられたのです。毛利氏となつてからは外寇防禦も必要であるが、更に又陸地の方も十分に防ぐ用意があるので、廣くあの邊の埋立をしたのでした。

その築城の時の様子を考へると大きな石や重い木材を澤山に運んだんです。それは大阪、江戸、名古屋ほどの巨大なものを用ゐてはありませぬけれども、なかなか石材も木材も案外大きな重い物を用ゐたのですから、迎も僅かな力では出来ませぬ。その時分には重い木材、石材等を運ぶために、竹を束にしてつる／＼滑る道を作つて、その上を滑らして運んだのです。外のものでは途中でひつかゝることがあるけれども、生の竹ならば滞りなく滑つて運ぶことが出来ます。高い所に上げるには、轆轤、かぐらさん、萬力車地といふやうなもので引上げて、竹の束の滑り道を滑らせると、どんな高い所にも重い建築材を引き揚げる事が出来る譯です。

これは萩の築城ばかりではありませぬ。他所の築城にも用ゐたものですが、それから柱の中を見ると、真中に穴を明け、それに蓋がしてある。これを開くと、その當時の計算書や設計の書類が穴の奥に入れてありました。それから燈火光明を採るのには皆主として松の木を切つて燃やす即ち松明です。また菜種を絞つて採つた油、即ち菜種油で明りを點けたり、それから昔は長門の北海では鯨が澤山に捕れました。藩政時代には長門の北海の漁村は、捕鯨が繁昌しましたから、頻に鯨の油を絞つて燈に焚いて明りを採ることをやつたのです、平時でも戦時でも用ゐました。

それから木材は建築にも燃料にも使はれるので澤山に入用であるから、山の中にも海岸にも普く造林してその伐採の古い跡が、今日でも方々に遺つて居りまして、或は豊浦郡の華山、一位ヶ岳であるとか、狗留孫山の官林等で大きな木材を造つた。むかしは滑山の官林その邊の谷川に筏を組んでどん／＼流したのであります。又海に近い所は、笠戸島の官林木材を海岸に切卸して水の上を運ばせました。

それから一方、南に向いた方では谷川の水を引いて大きな貯水池を造り耕地を開墾したのであります。近年は關西地方に非常な旱魃で農作物が良く出来なかつたといふ話もあ

りますが、寛永の頃に益田牛庵が造つた阿武郡の福田村の牛庵堤は非常に立派な貯水池で、近所の田をどれだけ灌漑したか判らない、又吉敷郡の小郡の先の鑄錢司の長澤堤も寛永正保の頃に、東條就類の力で出来たのですが、百何十町歩といふ原野の地面が、この灌漑の便を得て米が澤山獲れるやうになりました。又宇部の常盤堤は元祿の頃に、椋梨俊平の力で出来たもので、大きな堤ですから、耕作の爲には十分に用をなしたものでありませう。その外諸方を廻つて見ると、耕作用のために、良い沼池を設けられたのが幾所にもあります。それで川筋の水の流通を良くし、治水の仕事に注意を拂つたものです。防長には随分水の多い川がありますが、その中にも目に立つのは、萩の城下を流れる阿武川です。

元來萩の土地は、今の様な位置ではありませぬ、寄洲で水に浸され、港灣になつてゐたのを埋立をして、あの様な地形を作つたものですから、流路に無理が出来て慶長より天保年間に至るまで、洪水の禍を蒙つたことが七十餘回もあつたといふことですが、どうしても河川工事をすつかり遣替へなければいけないといふので、嘉永安政の間に今のやうな形に姥倉の掘割工事が出来上つたのです。

それまでは川上の方から橋本の邊に来て、そこから橋本川。即ち中渡川の方が本流であつたでせうが、それでは年々の水害があつて困るといふので、古い時代に今の松本川を開鑿して川島の上で、水脈を分岐するやうになつたのです。それでもまだ水捌が俱合能く行かないので、天保七年の大洪水の後に、思ひ切つて古い時の測量に鑿み、姥倉の新川を掘割つて剰水を海に落すことになり、それから萩の市中には水が暴れないやうなつたのです。

元和の初に幕府は、一國一城の制を定め、寛永年間には、諸侯に江戸參勤の令を發しました。長藩では天下の形勢、決して穩でないと察し、非常時用貯金の制を設け、また元の鑄錢司跡にて、急に新錢を鑄造したが、果せるかな寛永十四年には、九州島原の變亂が起り、長藩もその鎮定のために、出兵の命を受け、軍務の上に多大の功績を奏した働きは長藩の先見の明の發現である。又正保年間には、葡國船が長崎に来て無禮をしたので、之を打拂うた。これが即ちカリウダ船事件である。是より長藩は、九州諸侯と俱に長崎に聞役を置くこととなり、専ら外國の事情を、偵察することに務めました。

萬治三年長藩は、江戸幕府の百箇條に倣ひて、制法三十三箇條を定め、また農工商社

寺、その外諸種の部族に對し、別に制法簡條を定めて公布しました。寛永二十年に、從來の檢見法の外に、春定法を設けて、農村の安堵に注意した。古くから向三軒兩隣と申して隣組の制はおのづから定つて居り、早くより五人組、十人組の制度を設けたのであります。これは當時の藩政側の記録によく出て居ります。殊に注目すべきは寶暦元年重就（英雲公）家督の時から政務上に高速度の改革を行はれたことです。この時に撫育局といふものが出來て、産業を奨励するとか、文化の進歩の爲に、學者や技術家を集めるとか、内政を整理したり、總ての事業を促進する爲に、金融機關を設けたのであります。この間に一方には武道を奨励された。産業や學問ばかりではいけない、いざ事がある時には武力を以て奮闘しなければ勝利は獲られないから、その役に立つ人間をしつかり養成しなければいけないといふので、非常に高壓力を入れて勵まされた。

寛文、貞享から元祿、享保の間には、語るべき偉聞が澤山にありますけれども、時間のため略約して御許しを願ひます。さて爰に稱揚すべきは、延寶五年長藩が、紙幣を發行したことです。これは寛文の末から延寶の初に掛けて、諸國とも天災が多く、大風雨、洪水、旱魃、饑饉が到る所に起り、長州も、相當の損害を蒙つたので、財政整理に非常

の考慮を盡くし、官米剩餘の貯石高を準備引當として、幕府の免許を得て、發行の手續を了り、財務の窮乏を救得たのです。

むかしの益田元祥、梨羽頼母は逝き、その教旨を受けて、榎本遠江等が荐に努力して能く財政を治めたのです。

延寶より約八十年を経て寶暦に及び、撫育局の創設せられたので、藩政は忽ち活氣を生ずることとなつた。坂時存、長沼正勝、山縣昌貞の三老より治財の意見書を呈し、更に城中獅子の廊下に一局を置き、三戸四郎兵衛、村田爲之これに當つて、特に調査事業に力を盡した。それより寶暦、明和、安永、天明の約四十年を経て、寛政元年に重就は三田尻の別邸に於て、六十五歳を以て長逝した。この間に財政の整理から、文武奨励その外農村に對する施設も、製紙、鹽業、造林、治水に至るまで、凡べて經濟方面に必要な事項を急忙に作成することとなりましたが、この重就の經濟政策が、全く後世明治維新の皇業を贊襄せるわが藩大功勞の、財力資源を構成した根幹であつたことを忘れてはならぬ。

長藩に於て寛永より元祿までの頃は、武者修業が盛んであつたが、寶暦の頃になると、

長崎に往來して、漸く西洋の知識を研究することゝなつた。それは正保の昔に聞役の制を置かれ、また唐人送りの規則が設けられてから、防長の有志は、好機を得て、西洋の學術を修業する端緒を開いたのですが、これは専ら醫者が行つたものです。

さて寛永以來元祿以後までは、武者修業の繁昌でしたが、長崎は和蘭人が居るから、帯刀の武士は遠慮したが、醫者は帯刀をせぬから宜しかつた。昔は醫者と僧侶は諸國往來御免といつて、何處へでも自由に行かれたのです。武人は常に武装して刀劍を持つて歩くので、何時暴れ廻すか知れぬといふので非常に喧しいけれども、醫者と僧侶は武器を持たないんです。また平和を證據立てる爲に頭を剃つて丸めてゐたから、これが何よりの證據でござる。私は武人ではない、といふので何處へでも差問なく行かれる。醫者と僧侶は修業の爲なら江戸奥州でも、長崎その外でも勝手に行かれたものです。併し純粹の武人でも正しき武者修業の許可を得れば、何處でも歩き廻ることが出来たのであります。

かういふことによつて、藩政時代の防長人は諸方から知識を取入れることには相當に便利を得てゐたんですけれども、中々骨の折れた話で武藝の方もやらなければならぬ、産業の發達も圖らなければならぬ。又本を讀んで世の中のことを能く知るといふ研究、學問の方もやらなければならぬ。

昔より農は國の本である、百姓を大御寶と呼んで愛撫して居つた。防長にても農家を非常に大切にしたものである。春定の法といふ仕法があつたのは、前に申した通りであるが、これは年の初に必農家のために定められる仕法です。それは今年の作柄物人を豫め申立て、おいて、その後秋になれば實地に檢見をして、良いか悪いか見極める檢見といふのが行はれたものです。

最初はこの田からは、豫めこれだけ獲れるといふ見積を出したけれども、その後大風が吹いて大變な迷惑をしたとか、洪水蟲害で今年は米が豫期の如く穫れないやうになつたりすると、去年と同様の租税を納めることは逆も出来ないから、役人の出張を乞ふて、それを見定めて、それでは何程か減じてやらうといふやうなことを、懇切にやつたものです。

この春定の法は長州獨特の制度で、正月にその土地の庄屋の家に寄集つて、各宰判の勘場の代官手子から、収入租税等の内譯を取調べて本年はこゝからどれ位出せるか、昨年

はかういふ風になつてゐたから、今年はこれ位ならば大抵よからう、といふので春の初に精く調査するんです。併しあとて異議あらば十分に、申立てることが出来るやうになつてゐました。併しさういふお取調でありましたも迎も私にはそれだけの力はないから、どうぞこれだけの額を減少して貰ひたいとか、何か内輪の事情を訴へて、そこで申合の上これだけならば差支へないといふことを、熟談の上で都合能く定めたものです。それを春定と申しました。それから秋の收穫時になつて検見をやるので、今度は實際に見て調べるのです。さうして年貢の額を決めて行くといふ、洵に丁寧な遣り方で、農家に取つては餘程都合が宜しかつたでせう。

また産業増益のためには熱強の奨励をやつたものです。いざ戦争があつた時には銃後の生産勤勞を引受けて呉れるのは、農工商階級の人ですから、撫育に力を入れたのであります。その特産物としては前以て度々申した如く何よりも米鹽です。米が一番大きいので、今日でも防長では米が一番大きい産物です。それから鹽その他の必需品を作り又、藍を作つた。四國の阿波から藍作りの教師を呼んで来て、防長の南面の廣い沃地に藍と綿とを作つたものです。私共子供の時分には山口の附近から小郡を経て秋穂の方に向け

て、盛に藍も綿も出来たものです。それから數量は少いけれど砂糖も出来たし、織物、染物、焼物、塗物、籐細工、刀の鏝とそれに附屬する總ての金屬彫刻物、紙捻細工——これは今日でも盛んに奨励されたら實に結構なことであらうと思ひますが、中々精巧な紙捻細工が出来て、長門筒の名は江戸でも東京でも評判が宜しかつた。

それから櫛、竹細工、元結、水引といふやうなものが中々盛んに拵へられて、諸方へ賣出したものです。米穀その外の重要産物を大阪市場へ持つて行つて賣捌いてもよろしいといふ幕府の許可を得てやつてゐたんです。

その當時は、何處の大名もみんな大阪に藏屋敷を設けて、藩から廻して来る總ての物資を倉庫に入れて、一年に二回大きな入札賣をやつて、どん／＼賣るんですから、非常に繁昌したものです。それで非常に嚴重な取扱をして、役人等も見苦しい働きをしますか、殊に金銭上に行違ひを生ずるやうな不都合があれば、必切腹させたので、誰も彼も一生懸命でしたから、悪いことをするものも今日よりは少なかつたんです。

撫育局の管理してゐる米を撫育米といひますが、その時分と今とでは直段が違ひまけれども、兎に角に六萬石の米は撫育局の別途收穫に屬するので通貨に換へて運用すること

が出来た。他の行政官府とは一向に關係なく、特別の會計で撫育局限りでやつてゐたのでありますが、その頃の相場は玄米一石が二兩ですから、六萬石ならば十二萬兩になる。若し一石を今の四十圓とすれば六萬石は二百四十萬圓となる譯です。また鹽は餘程多かつたでせうが、これは數量と價額が分りませぬから、何も申すことが出来ませぬ。紙は六萬丸といふんです。二十枚を一帖とし、それから一帖、一束、一締一丸と十上りにしたならば、六萬丸は十二億枚である。半紙、美濃紙、小杉、廣折を平均して、一枚を一厘としても、六萬丸は今直段で百二十萬圓かと思はれます。

長州藩の經濟資源として、當時無比の妙案として、好成績を擧げたのは、越荷方である。越荷方は撫育局の支部であるが、固より本管藏元の管轄に屬して居る。これは北越方面より寄航する廻船業者の便利を謀りて經畫した、長藩官營の營利事業であつた。奥羽北越や蝦夷松前の奥からも、多數廻船が、各地より出荷する物産を運んで下關に寄港するのですが、今日ならば鐵道がありますから、敦賀に荷揚げをして何でも送ることが出来ますけれども、昔は便利な輸送機關がないから、長い海路を下關まで持つて來て、爰で十分休泊して、それから大阪に船で持つて行つて現金に換へるのです。所が大阪の

方の商人は中々素早い敏捷でありますから、田舎者の船頭をよい加減に草臥かして置いて、その足元を見透かして直段を極める、一軒や二軒ぢや定めないて、互に申合をして、これ以上には引取らないといふ。そこで船頭は非常に困り已むを得ず投賣捨賣をして、二束三文の安値で、手離して歸えつて行く。長州ではその氣の毒な様子を見て、可哀相だ、北越方面からはるばるやつて來た船主も船頭もさぞ困るだらうといふので、越荷方の出張所越荷會所を下關に置いて、そこに越荷の營業を開設した。豫定の經畫が都合能く參るので、會所は下關と中關と室積と三ヶ所に置いて、若し金が要るならば貸してやる、又倉も澤山建て、置いたから、倉敷料さへ出せば、船積荷物を預つてやつてもよいといふ法を立てた。

それで蝦夷松前から鮭と鯨と昆布、越後、秋田その他の米穀類を千石船に満載して下關まで持つて來るんですが、船頭等は途中で何回か怒濤に遭つて身體が綿のやうに疲れてしまふから、下關まで來ると、下關は出船千艘、入船千艘、西の大阪といはれたものであるから、こゝで休むところが是から又大阪まで行けば、大阪の商人に冷かされたり擲されたりして、船頭のいふことは中々容易に通らないから、それよりも下關、中關、

室積どこでも自由に船荷を揚げてこゝで金を借りて品物を預け、越荷方の手で大阪で賣捌いて貰へば、日數に餘裕が出来るから、船をもう一度原地に引返して、二番目の積荷が出来るとです。若しこれをやらぬ時にはその船は大阪まで行つて、向ふの商人に廻られたり冷かされたりして取引をする間に一月も二月も無駄に日數が立つてしまふ。

そこで二度目の荷物を拵へようとする、最早氣候が寒くなつて、海の荒れる季節になつて大變な難儀をしなければならぬことになる、廻船も大阪へ行けば一年一回だが、それを長州越荷方に頼めばそんな心配もなく二度目の荷物が安心して調へられるし、二度目に來ると前に來た時の入札の取引をしたその帳面を見せて取るべきものを取つて品物の勘定をして金を渡して貰うので、大變に悦ばれたものです。

長州藩が諸強藩と對峙して政治、經濟、文學、武術に力を盡したことは言ふまでもなかつたが、更に時勢に鑒み產業諸方面に努力したのも決して容易でなかつた。その便利を謀るため、江戸にも京都にも大阪にも長崎にも伏見にも、皆藩の抱へ屋敷が設けられ、留守居役といふ責任の重き役人が詰めてゐて、諸方との駈引をしてゐたものです。これは物資を貯へて置く爲に倉庫があつて、多くは倉屋敷と稱したのです。

その時代には、金錢經理の總元締を司る所を藩では藏元と稱し、藏元役所には、中央金庫があつた譯です。本藩の方が元ですけれども、それに次いで、江戸が主なる權威を占めてゐて、もと麻布龍土の中屋敷即ち檜屋敷には、特に地下金庫がありました。石で疊んで内側を木で張つて濕氣の來ないやうにして、金とか重要な貴品類を蓄へて居つたのです。その構造等も昔としては餘程丁寧に注意したものゝやうに聞いて居ります。

それから深川の方には、今深川八幡の手前に鶴歩町といふ所がありますが、その屋敷が、長州藩の下屋敷で、そこには長州藩用の飯米、木材、石材等、凡べての食料物資また建築材料一切を貯藏してありました。これは今日鐵道局が管理して貯木の置場としてゐる、大きな池がありました。江戸の屋敷には何時火事が起るかも知れぬから、建築材料を十分に用意して置かなければいかぬといふので非常時用の必需品を大小残らず彼處に入れて置いたのです。私共明治何年頃でしたか、見に行つたことがありますが、大きな木材が水底から七八段位積重ねて水の中に浸してあつたのですが、鐵道局でも深川邊にある貯木場で、長州のが一番よく出来てゐると評判してゐました。

それから今日は地下室といつて頗に偉いものゝやうに言ひますけれども、舊藩時代に

も、相當智能のある人が考へて、何時頃からか穴藏を造つたものです。それは地下を空氣のよく通るやうにして、其中に這入るときは、龕燈に蠟燭をとぼしたり、金網提燈に明りを付けて、防火に十分用心して、樂に歩かれるやうに作り、大切の品物を鄭重に出し入れしたのであります。深き地底に掘込んだものでしたから、地震や戦時の爆弾位で、なかなかこはれる心配はなかつたのでした。いづれ古い昔の岩窟穴倉の遺風を改善し、また鎌倉時代戦國時代の頃に、軍用式に造られた、矢倉式の改良進歩に成れるものでせう。又櫓といふのは高い所に臺を拵へて積上げたものを櫓と今いつて居りますけれども、元はさう高い所でなくても、櫓は矢を入れる倉でしたが、後には矢に限らず、いろいろの武器雑具を入れる倉となりました。今日でも宮城の廻りに櫓が残つてありますが、桔梗門の傍の櫓は現在内閣で管理してゐる重要記録を入れてあるのです。成るだけ風通しを善くし、濕氣の這入らないやうにしてありますが、長州の方でも皆櫓に貴重品を貯藏してありました。

此頃でも鎌倉においてになれば矢倉といふ名前が残つて居ります。例の政子、實朝の墓のある壽福寺の山沿ひの唐草矢倉は、内部は墓場になつて居りますけれども、すつかり内面の土石を削つて如何にも立派に出来て居ります。我が毛利家でも江戸時代に大切なものを貯藏してあつたのは、皆矢倉造りの倉庫であつた。而して特別に秘密を要するものは、悉く穴藏即ち地下金庫に封藏してありました。今は大分様子が變つてよく判りませぬけれども、兎に角麻布の檜屋敷の構造は江戸時代の學者の書いたものによつても餘程勝れたものであつたといはれて居りますが、庭に遺つてゐる太閤秀吉から受領した、桃山式の雪見燈籠や、また元祿頃に江戸の大火で焼けた所の日暮門は實に桃山よりの頂戴物の名作で、青貝の螺鈿の門扉で本蠟塗の大門であつた。惜いかな、一夕の丙丁の災でこの國寶を烏有に歸したのは、如何にも残念至極のことでした。

辛篇 防長藩政に映發せる精華

わが日本人また防長國人は、太古文化の淵源たる神代史を知らねばならぬ。これは何よりも重き國學的主張である。わが帝國としても、防長としても、この神代ありてこそ、天地に盈つる永遠の光輝ある國體を崇敬するのである。皇室を尊崇して、皇國の主體と仰ぎ、今日に至るまで大稜威を拜するのは、全く神代史の宣傳と謂ふべきで、眞に外國に勝れた所である。故に若しも神代の傳記を削るものありとせば、それこそ他の平凡なる海外古國の國體同様となつて、忽ち自國の尊嚴を失ふに至るのである。

われ等防長の地に生れたる者は、辱くも神國の民であるから、君子國の人たることを、忘れてはならぬ。祖先も子孫も、みな同一の血脈を永劫無窮に傳へねばならぬ。北畠親房が『大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く、統を傳へ給ふ、我が國のみ此事あり、異朝には其の類無し、此の故に神國といふなり』と神皇正統記に書いたのは、我等の感佩すべき至言である。御互に能く古往將來を考へ、深く生氣を啓發して、

防長精神の眞本領を作興して、黽勉已まず、大に天下國家に報ゐなくてはなりません。わが神代の民族が、言語を以て、外國に交通したことは、無論であるが、更に神代の文字ありて、海外に相方の意思を文通したに違ひない。埃及、巴比倫、波斯、印度、支那、滿洲、朝鮮等の古代文字を考究しても思當るものがあります。苟も言語文章がなかつたならば、あれ程の文化は、進んで居らなかつたであらう。

防長の地は、わが帝國本土の西端に位して居る。その山巔に、海濱に徘徊して、肇國數千年の盛運と、皇威の恩波幾萬里に及べる由來を細思するときは、萬葉集に歌へる。

御民われ生けるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば
を複誦せざるを得ません。

そもそも防長の土地に於ける古い時からの文化を考へるならば、北方の日本海に沿うた地勢は、荒海を距て、あの通りの廣地を對岸に引受けて居るのですから、その方の文化は申さば北海文化で、こつちの九州や日向の邊から入つて來るのは南洋文化である。北海の文化は印度の方から支那へ入つて行き、支那から朝鮮に行つてそれから北方へ廻つて來たのですが、潮流の都合の好きさうな所で遂に出雲や長門の方へ自然流れ込んで渡

つて來たのが即ち吾々共の防長文化を誘導することゝなつた。

これは神武天皇以前のことであつて、南方から來る文化は又南洋方面を経て、日向より豊後、豊前に入つて來て追々こつちへ進み遂に豊後水道の邊りから瀬戸内海に入つて來て、奥へ進んだ文化ですから、吾々共の申します文化の系統は、北海文化であり、南方から來たものは、南洋文化である。つまり北發南下の潮流と、南起北進の潮流が、造化の力に依り、相互に上下往來して、巧に調合鹽梅し、爰に上古の文化を、醇成したものでありませう。

神武天皇の御即位から、二千六百年を目出度御迎へするは、洵に有難いことであり、その絶世の御偉績を感嘆し奉るは勿論であります。吾々共が爰に研究せんとするのは、天皇の御降誕生なさらない前の古い時代の文化で、日向文化と稱するものよりも出雲文化で入つて來た方が古いのであります。日本の國體の根本は實に四千年、五千年の昔に、創建されたのですから、早くも神代或は上代に於てその最も古いものは約五千年の創世に遡る譯であります。

昨年私は某集會の席上で不完全ながら、上古開闢の文化に關し、古事記、日本書紀、

舊事紀、古語拾遺、神皇正統記、出雲風土記などに據り、鳥渡愚見を述べて置きまし
た。然るにその後何とかいふ帝國大學の教授が、日本文學の上より見たる日本精神、
といふ題で、數回に亘りラヂオの講演をせられたのです。それから、某友人が私を尋
ねて参り、いろ／＼談話の際、『先夜某教授から、日本精神に關する詳細の講演を聴い
たが、あれは昨年貴下が話されたこと、大抵同じやうなものではないか、大變能く
似て居つた』と申しましたから、私は『そうでしたか、それは洵に結構だ、私が言ふ
たのでは、餘り聽いて下さる人はないのじやが、折角大學の教授が偶然の暗合で、私
と同様の論説を述べられたならば、天下の公衆は謹んで傾聽したでせう、それこそ何
よりの欣快なことである。むしろ自分は愚見の聲援を悦んで居る』といつて笑ひなが
ら、茶話を致しました。それからまた、つい近い頃でしたが、何とかいふ文學博士が
日本の文學の進歩を頻に説かれた。その中に奈良朝から平安朝にかけての送り假名、
それから乎古止點のこと、亘爾乎波のことを放送せられました。これも私が現に昨年
こゝでお話申上げましたことで、かの毛利氏の古い先祖たる大江姓の人々が、いづれ
も學者であつて、皆朝廷に文學を以て勤めた人でありましたから、その頃のものはか

りでなく、訓解讀方に於て、面白くうなづくべきものが多い。また別に訓詰點讀の業
もありましたから、なかなかやかましい。清原點や、菅原點に依つてその本に點を付
けてある。今日に残されたものゝ内に、經書歴史の外に朝野群載、本朝文粹などが
ある。折角讀書家を助けるために訓點を付けたのではあるが、それが古訓であるため
に、今日の學者では逆も讀まれない、何だか速記の符號に似た様な妙なものが書いて
ある。

乎古止點、亘爾乎波のことも、同じくこの博士から講演がありました。これも私が
昨年お話したのと大抵同じやうなことであります。これは後に速記を御覽下さると御
氣がつくかと存じます。

もと萩城の南側の櫓の上には矢倉記録、かます記録など申して、戰國時代の古文書類、
並に大内氏より傳はれる殘闕書類が、餘程澤山にあつて、いづれも當時を知るべき、貴
重の史料でありましたが、明治三年中央政府より、舊物廢棄の嚴令を下された際、残念
ながら、凡て反古紙として棄てられました。何とも云はれぬ惜いことをしました。その後
また萩並に山口に於ける、毛利氏の倉庫十餘棟に收藏してあつた蟲入記録と云はれた重

要文書を、悉く故紙と稱して、棄てられました。今更取戻しのならぬ惜いことでありませぬ。

曩に一月十一日の夜、何人カラチオドラマで『毛利家の人々』といふ題で立案した演藝を聞かされましたが、その脚色は新しく研究されたものと思はれました。長州藩が元祿以來非常に國務に力を用ひ、且又藩の内政には特に骨を折られたといふことですが、經濟豊富にして、その場面が餘程面白く演出された。また重ねて申しますが、寶曆明和の際重就（英雲公）は藩士中より智能に勝れたる吏員を採用して、財政整理のこと、撫育の方法に就いて、内政を根本より刷新し、産業を奨励し、土地の開発等國勢の進展に、大努力しなくてはいけないといふので、更に有爲の偉才を精選して、當らしめたのであります。

その嗣子たる治親（容徳公）は善く父君を輔けてその偉業のために、奮勉せられたが其の夫人は、松平定信（樂翁）の姉君でした。其れが爲に政務の上に、おのづから援助を得られたことが少くなかつたでせう。また夫人の父君は、田安德川宗武で、當時江戸に於て有名な萬葉派の國學者であつた。前に申しました三田尻方面の中ノ關、防府一帶

の産業が發展したのは、この時代であります。それをラヂオドラマで、暫くの間聴かされました。此れは私共が言ふたのではない。全く他所の人の研究であるから、毛利氏關係の記録を、餘程調べて案を立てられたのだらうと思ひます。つまり慶長以來二百餘年の間、藩の政治、武道、文學、産業といふやうなことには、いろ／＼な人物が出て居りますから、その間農村制度には幾多のすぐれた遺聞が傳はつて居ります。目安箱は、固より幕府方にもあつたのですけれども、長藩のは幾分か變つて居つたやうに思はれます。殊に口上書取といふ一法があつたが、これは學問の全くない人だと、何か心に思つてゐても、自分の主張すべき理窟を書いて出せと云はれても、書いて出すことが出来ぬ。それでは折角立派な意見があつても、知らせることが出来ない。到底書いて出せといふのは難しい話だから先づ役所の玄關を開放して、誰でも、さて私ばかりいふことを考へてゐるが、どうでしょうかといつて、政治でも、經濟でも、治水や土木のことも、農作村政に便利な方法も、或は山林のこと、開墾整理のことも何でも、様々なことを口上で喋るならば、こゝに出勤の役人が、それを聽いて懇切に書取るのです。これは大變面白い遣り方で、埋もれて居るやうな憐れむべき智者の意見を、四方から集めることが出

來たのです。

それから人物養成のためには、長期間に涉つて非常に骨を折つたものです。又文學よりも武藝の方に多く力を入れた。今後何時如何なる變亂が起るかも知れぬが、まさかの時にはやはり、武力がないと勝利を得ることは出来ぬぞ、その武藝を仕立てるには、唯撃劍だけでは足りない。武藝十八番、有ゆる方面の役に立つやうな大鍛錬を遣り、それから形而上の精神に大鍛錬をせぬといかぬぞ、といふ仕方です。それが非常に宜しかつたのです。

凡べて爲政者の善機を斷せんとするには、詳に天下の情勢を察し、多く有用の英材を求めなくてはならぬ。しかし人を用ゆるには、豫め人を觀るの明がなくては事を誤るであらう。況や天下の政務を任すべき、責任者に於てをやである。つらく徳川幕府の政策に就いて考ふるに、幕府は當初より苟且偷安その覇權を永久に持續けんとして、いつしか自家太平の夢を喜ぶの、迷路に蹈込んだものと思はれます。

幕府は武人の服從策として、諸侯に江戸參勤を命じ、その妻子を江戸に呼び留めて人質とした。また諸侯の外に、諸藩より隨從せる勤番の武士を江戸城下に集め、京都、大阪

江州、伊勢その他より富豪の商人を江戸に招き、延寶、天和、元祿の頃より専ら江戸市中の繁昌を謀り、そのため大衆をして江戸は立派だ結構だと大に奢侈を好んで陶醉に陥らしめたものでした。最初の目論見は天下の武人を懐柔して全く幕府に反意なき様にする積であつたが、往來の武士は頭髮を本多鬻にして腰には朱鞘の細身の大小刀を落し指しにして遊里に徘徊したり、市中の女子は新風俗の流行を喜び、兵庫鬻や文金の高島田で新曲の時謠を唄ひながら芝居場に入ると云ふ遊怠猥褻の風習がおのづから浸渡ることになり、諸藩の武人を骨抜き鱈にする手段がはづれ、却て幕府直參の旗下士のみならず、江戸居住の幕屬の武人どもの方が、逸早く驕奢に靡き、學問も止め、武藝も忘れて、腰抜け侍となりました。そこで外國の船は寄せ付けぬことにして、此方よりも大船を造り外國に乗出すことを禁止し、凡べて外國との往來は出来ぬことゝなつた。その上に國內の武人は、幕府の探偵政策の嚴密なるがために、凡べて沈黙して、一向反意を企てることもなく、従つて勤王とか名分とか云ふ嚴肅な文字は、幕府側には殆ど忘れられる様になりました。

幕府は又覇政永續のため、愚にも舊來の幕府が嘗てしなかつた。不倫陋劣の手段を弄し

た。江戸出入の民衆に向つて東海道の宿驛その外に苛酷の命令を發し、また御茶壺や御鏡餅の行列並に繪符の御用荷物を出して、之れに土下座を命じ、旅人を苦しめた。徳川幕府は又京都禁裏に對し不敬至極の我儘を働き、天下諸階級の民衆に對しては、言語道斷の無理を使掛けて壓迫し、四方八方に不寝番を見張らして二百餘年の懶夢を貪りました。凡そ何物にも興敗あり盈虚あり、決して永福をいつまで獨占する譯には行きませぬ。

そこで武力を失ひ人氣を失ふた幕府は今後どうなるか、一朝何か事の起つたとき、直參の軍隊を繰出すことは到底出来ることでない。且又幕府は豪奢のために、意外の浪費が嵩む。そのため諸侯には巨額の手傳金を、商人には當用金を、農家には冥加金を、その外に曰く何曰く何、と零細の資源までも案出して、厳しく課税致した。如何にも苛斂誅求ですから、何人も幕政を以て、洪水猛獸の禍よりも恐るべしと考へ、日夜一息一喘、その秕政を憤慨せぬものはなかつた。

當時の幕は不治の思想病に罹つて居た。自身には武力がない、又幕政を整頓すべき人才がない。若しまた戦争が起るとなつたらば、軍費を出す見込がない、まして長期戦となるときは、到底軍用資金を何として繰出すか氣の毒千萬の有様である。

世相を観ずるに長幕間に窺はるゝ禍福興敗の轉倒した次第は、實に人間世界の盛衰變移の狀況を能く映寫したものである。防長人は節約儉政を守つて、臥薪嘗膽して勤儉伸張して行く。幕府は猛獸的苛政を行ひ、天下の貨財を勝手に徵收して浪費するのである。

苟も經國濟民の志ある者に問ふたなら、之を何と言ふであらうか、その庭逕懸隔の差は智者を待たずして明白であります。

防長の國勢が隆昌に完備したのは、つまり天保度の改革である。前後の緩急はありませんが、文武の訓練から、財政經濟の難業に至るまで、細大縦横に、深長鞏固に、整理されたのは、敬親在世中の天保の改革と申すべきである。その經由した途程は、寛永よりとすれば、先づ二百餘年であります。長藩の興隆する所以は、前述の拙話を御讀みなされば、大抵御分りのことと考へますが、これに對して幕府の方が、忽ち衰退に赴くのは如何なる次第であるのか、豫め申上げたいと考へます。

幕府の財源は各種の税金、諸階級よりの調達金、借入金で、多數幕吏は大小全部とも、之に依つて衣食し、公設用途も悉くこれで經營したものである。而して諸國にある金銀

銅鐵、其外の鑛山または、通船商賣の繁昌する大都會の如きは、幕府より朱印地として直轄収益したものでしたが、防長二州には幸にして朱印地はなかつた。さてこれから申さんとする幕府の經濟政策は大失敗であつた。幕府は一般財貨の融通を潤澤ならしむるために、諸侯に紙幣發行を許して、幕府自身は金銀の正貨を使用した。そこで諸侯の領内では紙幣で何の用も濟んでしまふから、平日別に使ふことのない貯藏の金銀貨を悉く吐き出させ、これを取上げて遣ふことにする寸法で、こうなると京都、江戸、大阪、長崎、その他幕領の管轄地、また東海道、中山道、木曾街道その外國道筋を通貫する各宿驛、また各地に散在する朱印地に於て支拂ふべき細大の費用は、凡べて金銀正貨を携へて計算せねばならぬので、一應は都合の宜しい妙案と喜ばれた。それは日本中の諸侯の領土は、萬事に紙切れで、満足する筈になつて、結構な金銀貨は谷川の細流より集る清水が江海に注ぐやうに、幕府の金庫に流込むとの算法を執つて、大に勘定奉行を驚かしたのであります。そこで幕府は金庫に剩餘する所の金銀貨を鑄潰して、新貨を頻に改造したが、此間中央の爲政者と金座銀座の主任者とは、果して算法意見が一致したかどうか、若し製造方に毎回差異ありとすれば、その結果はどんなことになつ

たか、その上江戸大阪の富豪よりの借入金に對する償還方法に於ける始末などを審密に考へたならば、或は肝膽を寒からしむるものが少なからぬことと思はれる。正貨を使ひ通す幕府側と、紙幣を以て満足すると云ふ諸侯側との兩方に於て、その勝敗はどうであつたかといふに、結局紙幣側が勝つて正貨側が負けることになつた。その詳細は長州藩の紙幣行使の始末を考究したならば、明瞭に分り易いかと存じます。長藩の紙幣は、専ら信用を維持することに務め、割引相場を以て正貨に引換えることが出来た。米その他の物資とも引換えた。また大阪取引人並に藝州石州の近隣地には差支なく通用し、その上損札は速に引換を爲し若し偽造者あらば非常な嚴刑に處した。是等の要件が、長州藩札の信用が高まつた所以で、その紙幣と正貨とに就いて申すべき事情は、餘程深甚複雑なるものが多いから、長時間の解説でないと、到底顛末を語り盡くすことは出来ませぬ。

幕府が如何に安樂の穩夢を願ふても、決して彼の爲に世間が授けて呉れない。四方環海のわが國は、何處から濁浪の打寄せて來るか油斷は出來ぬ。天明寛政の頃林子平は、外夷の幾度もわが北陸を侵すのを憤慨して、海國兵談や三國通覽を書いて、大に武人の志

氣を喚起した。文化頃には西夷等が長崎を騒がした。防長は海上交通の便があるので、蝦夷地の警報は越。荷。船。が持て来てくれる、長崎方面の外警は唐。人。送。の。醫。者。が、持還へつて詳報したものですから、篤志の學生は、いづれも蘭學を修め蘭書を読んで海外の新知識を得ることゝなつた。前。野。良。澤。、杉。田。玄。伯。相尋いで起り、漸次異國の事情を知ることゝなり、防長でも爾來和蘭人に接し、蘭學に志す者どもが、次第に増加し、随つて後日の隆運を見ることになりました。

地。圖。の必要は、人生事業の何物にも缺くべからざること、平時でも戦時でも、政治に經濟に武道と云ひ文學と云ひ世間一般の用向に地圖を持たぬと盲人が杖を棄てた様なもので、見當違ひのことになる。それで大昔から治亂いづれの世にも、地圖は早くから出來て居つた。

長州藩では繪。圖。方。と申す役所を設けて、古くから製圖に巧みな穎才を擧げて、毎年古圖も新圖も造らせたものです。ずつと古い圖は知らぬが、慶長寛永からは引續き後年まで精細な物が出來た。折。疊。にしたり、掛。軸。にしたり、卷。物。にしたり、屏。風。にしたり、種々便利なる地圖が作くられた。いづれも彩色入であるから、一見すれば直ぐに鮮明に分か

るのである。萩。の。城。下。の全圖は、大幅のものも、小形のものも、澤山に残されて居る。山口の明。細。圖。も慥に見たことがあつた。又防長の全圖は一枚續きの大地圖と、十數枚に別かれた切り圖とがあつた。この外に日本全圖も、防府、下關その外藩内重要都會の圖面が、幾通りも出來て居つたことと思はれます。用。紙。は精良の紙質を選び彩色は不變の繪具を用ゐて善く永久保存に注意したものであります。江。戸。の。地。圖。も慶長寛永以來數十種出來て居ります。その沿革などは如何にも面白い。私も東京には六十七年ほど住んでゐまして、土地の模様も存じて居りますが、兩方を對比すると互に特長がありまして、随分防長側の製圖に於て勝れた所もあるように見えます。

人間生活の上に、忽せにならぬのは、時。である。古來時は金なりと申す如く、何人も能く時を大切にせねばならぬ。上世と後世とは、時を計る仕方が違ひ、その器具も變つて居りますが、極古い時代より各寺院で、時。の。鐘。を鳴らして、晝夜の時刻を一般人家に知らせ、城内では櫓上で太。鼓。を打つて、武人の屋敷に時刻を知らせた。天文年中には葡國人が山口に時。計。を持來つたから、その後年代を経て、西洋風の時計が防長人に用ゐられた。また日本製の改造せる時計も、種々使用された。日。時。計。、水。時。計。、砂。時。計。、蠟。燭。時。

計。線香時計、打時計、巻時計、振時計と、各種の變革を経て、漸次西洋風の時計に進歩して來たが、舊藩時代早く蘭人から傳來した古い時計が今でも遺つて居る。

農村の仕法は生産上頗る重要である、古來の自作小作などの習慣も研究して置くべき必要がある。田地も一步、一畝、一段、一町と區域が付けられて居りますが、時代に於て尺度打繩など算法に幾分の差異があつたから一概には申されません。豪農の貢租も規定の公役がありますけれども、小農の加調米即ち小作料も或は何俵または何石に對して綿密なる春定法や檢見法に據つて定められたもので、その枺目も一合枺、五合枺、一升枺一斗枺など、それぞれ違つて居りませぬ。上代の物は勿論ですが、戰國時代でも江戸時代のもとの大小の相違がありました。また一俵と云へば、防長も江戸もその外通常諸侯の領土では、大低四斗俵ですが、京都の如きは特に二條の藏米は凡べて五斗であり、越後新發田藩の納租米は六斗であつた。それかと思へば下關や大阪あたりの仲師扱のものは、積荷の都合で三斗八升にして賣買して居るのもあつた。

昔の武人が一家を支へるために受取る祿米は、防長でも江戸でもまた京都の公卿衆でも凡べて藏米取りの給祿であつた。その給與される祿高は、すべて家祿と申した。併し知

行高とか知行米とか云ふたのは、領地を知行して受けたから、知行と稱したのである。

それ故に領地なきものは家祿即ち給祿で藏米取でありました。藏米の不足を補ふため諸方の飛地から給米を受取りましたが、これを浮米取と云ひました。その身分階級の扱方に依つて、給祿を何石とか、何俵とか、何人扶持とかの區別をして居りました。何石は確定した根帳入りの本祿ですが、何俵の方は役料並に不變的でない給與の祿米である。而して何人扶持として給與さるゝ祿米は臨時の雇侍その外、半永久の招聘で抱入れられた者への給祿であるが、江戸の札差や長州の世帯屋が米切手で粃米、玄米、精米の取引勘定をしたのは、案外に巧妙な習慣を残したものがあつた。

戰國時代より藩政時代まで面白い名物として賞用されたのは、紙鳶（たこ又ようず）と竹馬とである。これは決して小供の玩具のみでなく、昔は一般大人の用具となり、頗る諸人の便利を助けたものでした、これは飛行機やグライダーの代用として、これに乗れば高い處に上り、又綱を付けて引歩けば、何處にでも移動が出来る。又城の屋根に瓦を上げるとか、重い物を櫓の上に揚げるには、紙鳶が便利です。若し大型の凧（たこ）ならば、二人か三人の技師を乗せ得るのですから、それに乗れば相當の仕事が出来まし

た。今日でも上手に利用せられるならば、餘程お役に立つてせう。また竹馬は更に面白き用具で、若し一層の改善を施すならば、決して小供の遊戯に止まらず、非常な必要器械と爲り、自轉車の代用になるでせう。竹馬は竹でも木でも二本の棒があれば、容易に作られる。學校に行く小供でも、御用聞きに廻はる商店の小僧でも仕合せるでせう。次第に操縦が上手になると、十分に自轉車の代理が務められ、走り方も餘程敏速になります。之を作る代金は、殆ど零細の安價に過ぎません。その上尋行く先方の玄關に横付けとなり、少しの階段なら、それを樂に登るのに差支はない。この便利なるものを、何故に忘れたか、これは戰國時代の好發明の遺物として、是非とも今日に復興乗用なされたいものです。

今更事新らしく申すまでもないが、人間が此世に生れ出て死ぬるまで、一生涯の間何よりも、第一番に大切なものは生命である。生命はただ一箇だけである。これを失へばあとに代りはない。これは貴賤貧富何人でも同様である。故に誰も彼も生命だけは、特別に大切に居る。これは禽獸でも草木でも、凡べて同様である。然るにその生命を劫かすものは病氣であります。油斷をすると病氣が生命を奪去ることが多いのである。こ

れは世界開闢以來の大問題であるから、何人も更に深き注意を拂はねばならぬ。病氣は固より恐るべきであるが、輕症の時に早く手當をすれば、屹度平癒する。若し重患になるまで捨置いたならば、猛獸よりも水火よりも恐るべきで、生命は忽ち必滅するのである。いくら哀しむとも惜しむとも間に合はぬ。そこで大昔から醫者に乏しき僻境不便の所に居る人々も、病氣に對しては、常に注意して居りますから、農家でも漁村でも、必先づ自家治療を以て、草根木皮より精妙の藥種を採取して、銘々に病氣を治療したものであります。後世は和漢醫も、餘程療法藥劑とも進歩して治術が進み、遂には西洋醫術の研究にて、療法はその後今日の隆運に至つたのであるが、古い昔には素人は開闢原始的の療法を考へ、各人が自然直覺の考に依り、自身で治療することが出來た。これは諸動物が、造化より與へらたる自然の智覺に依り、その感觸を働らかして、動物自身の病氣を平癒させて居るのであるが、人間天授の性能は固より動物に優つて居るので、尋常の病氣は、自分の智能で治療し得るものと考へて居つた。

極古い田舎生活の子供や婦人でも、負傷切疵の時には、直ちに唾を出して塗れば忽ち平癒する。また腹部、脚部などに痛があるならば、局部を揉むか擦すれば、自然と好くな

ります。また病苦に因り湯で温めたり、或は水で冷やしたりする。感冒の氣味があれば發汗させる。食滯にて腹がつかえるときは吐かせたり、瀉させたりして、腹の掃除をする。また灸治鍼療を致します。その近所に温泉場があるなら、幸に澡浴して宿痾を治することも、普通に知られて居つた。

太古より注意したのは病氣の恐ろしいことで、不便な土地に居住すれば、大抵の病氣は自分で直さなくてはならぬ。先づその手近の話は、庭の隅や背戸の畠に藥草を植え、あれはぶ草、これはかみつれ曰く何、曰く何と、古人の製藥法に倣ふなら、素人でも相當の藥を製することが出來たのであつた。昔は昔ほどに一通りの藥が出來た。草根木皮も古人の智能で精妙の品が造られた。内服には煎藥、水藥、散藥、丸練、煉藥があり、外科用には膏藥、塗藥など種々工夫をしたものであつた。また膾、臍、臍や黑燒藥は、特別の物であつた。黑燒にはいもりの黑燒、蛇の黑燒、猿の腦頂の黑燒、龜の甲の黑燒、その他の種々の珍藥がありました。昔から必要は發明の母と申しますが、何でも非常に切迫した場合には、案外善き智慧の出るものである。戰國時代には戰傷病者が多い。また治世は交通が頻繁になれば、随つて病氣が多くなるので、防長では藥園を開き、藥草を栽培し

て、藥を造つたものです。さて昔のことを思返せば面白く感ずることがある、拾芥抄に春の七草として「せり、なづな、ごぎやう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞ七草」とある。又山上億良の歌に

はぎをばなくづばなでしこをみなへしふぢばかま又あさがほの花

として秋の七草を詠じて居る。春の七草は凡べて食用として衛養的である。秋の七草は藥用として役立つのである。萩は葉を茶の代用にする。尾花は血止めに宜しい。葛は發汗解熱の葛根湯になる。撫子は利尿劑、女郎花は順血劑と云はれて居る。藤袴は利尿劑となる。昔の朝顔とは今の桔梗のことで、桔梗根と云つて、鎮咳の妙藥として用ゐられて居る。此の如き藥種を利用して、昔の療病も意外の效能があつて、病氣も平癒し長命してこそ、天下の大豪傑も造り出だされたのである。防長昔時の實驗もその確證を物語つて居る。然らば草根木皮も、人物培養の好資源と申すべきであらう。むかしの戰傷病者には、應急手當として、血止藥、燒酎、繻帶など簡單で濟んだが、後世の家庭常備藥は、理化學の進歩に依り、更に幾層の用心藥を増備した。速に病苦を治癒し生命を救済するには、少くとも「ヒマシ油、オリブ油、芥子末、亞

鉛華、明礬、硼酸末、硼酸軟膏、絆創膏、乳酸鐵、片腦油、石油乳劑、コロダイン、カ
ンフル丁幾、ヨード丁幾、重曹、食鹽、アルコール、アンモニヤ水、葡萄酒、蜂蜜、揮
發油、その外の藥劑類を備置かねばならぬこととせう。

何人も上手に病を療治して身體が強健となつたら、それからは早速に長壽と云ふことを
希願するでせう。昔は二百歳以上に生き延びた人もあつたと聞いては居たが、後世俄に
短命となつて來たのは、如何にも残念なことだ。但しその人の養生次第で、屹度長壽の
効果は現はれるに違はない。最近でも百歳以上の老人は決して少くない。私の對話した
百十一歳の鳥栖越山、また百七歳の田中ヨシ、百二歳の榎本新平はいづれも老健驚くべ
き老人でした。また百二歳の棚橋絢子など珍らしき名物でした。又未だ面會しない百歳
以上の男女が、遠き地方に安寧に老居して居ることと考へます。今日でも九十以上の健
康者が澤山ありますから暫く待てば、やがてそれぞれ百歳以上になるのでせう。人間と
動物を對比すると、その長短の差が如何にも異様である。動物學專修の學者が動物の壽
命に就き書いたものがありますから、御参考までにあらまし列舉して置きます。龜は三
百年、象と鯉は二百年。鷹は百六十二年、鳶は百十八年、鵝鳥、鴨、梟、鳥は百年、鷺、

馬は六十年、熊、鳩は五十年、鶴、蛙は四十年、牛は二十五年、猫は二十二年、雞は二
十年、兎、田螺、イモリは十年、蝸牛は九年、鼠、栗鼠は六年、ナメクジは三年、蛛は
一年か二年、コホロギは五月、蚤は三月、大蝶、蟬は四十日、小蝶は十日、蠅は八日、
右の如く人間に短命あり、動物に長命もありますが、多くのものを寄せてこれを平均し
たならば、矢張人間の方が長命である。いづれの國に於ても、長壽者は男子よりも女子
に多くあることと存ぜられます。わが防長に於て昔からの自家療病法も、藥草製劑
のことも長壽保養法の如き、ずっと昔の慣習傳法を鹽みて頗る思當ることが多い。
文化文政となると、國內も海外も餘程情勢が變つて來ました。殊に世界一般の事情が段
々映發して何となく心配の時代となつたから、迎もこの儘に安座飽食しては居られませ
ぬ。長州藩は江戸と長崎の兩方に心を配り、更に時世に對應すべき應急の準備を爲すべ
き必要に迫られたのです。國防攘夷の志士起り開國通商の外交家もあつた。曩に林子平
高山彦九郎、蒲生君平、伊能忠敬、近藤重藏、佐藤信淵の如き者の輩出したのは決して
偶然でなかつた。

天保の初に近世長州藩の英主として尊敬さるゝ敬親が家督を繼いだとき、領内諸方に天

災もあり、外警も騒然として心配が已まぬので藩政一般に大改革を行ひ、古法新政を調和取舍して専ら弊政を刷新することとし、益田元宣、村田清風、中谷章貞その他の人材を選任して専ら改革の目的を實施せんと務めたのである。固より防長善政の良果を奉持して、弘く天下に報ゐんとするの奉公盡忠の事業であつた。幕府にも外藩にも、天保改革と云ふことは荐に言はれて居りますが、防長政治の改革は、いづれの藩よりも一段の大規模であつた。

天保の大改革は、長藩の政治法律以外凡べて擴大の範圍でありましたが、その最高の規模を定められたのは、教育と軍備とであつた。教育は藩内男女に對する高等普通の學科もありましたが、最高學府として舊式の明倫館を改造して後年その位置を城下の中心と定め、出入に便利なる所に移した。先づ從來は漢學が専門で、徂徠學、朱子學を根本の學派として古型を守り、國學にも洋學にも頭を傾けなかつた。これから青年學生には、詳に國體の本義を知らせたしとの主唱で、學課の第一に國學を置き、その次を漢學としたのである。尤も漢學は古學とか、徂徠學とか、朱子學とか、陽明學とか徒らに牆壁門戸を構へて教ゆるのは折角發展すべき才能を横道に引入れ、學問の本旨を謬る虞れがあ

るので漢學は儒であるから、それは孔子の正しき學問を聞き、その教旨を專修すれば宜しい。その後歷代に唱道して居る澤山の學説は、凡べて攻學の參考とすべきである。それだから傍人の異説に惑はされぬ様に、儒學の本體となる正純の學説に注意せねばならぬ、善く氣を付けぬと、青年の腦味噌を腐らせることに爲るぞと懇切に訓誨し、又その入學生も身分階級を論せず、階級の格式を撤廢して、穎才の學生を廣い家庭より採擇するなど、人才を選ぶには如何にも細心に注意したものです。

防長の教育に關する話題も頗る多大である。國學、漢學の外に洋學の事が後日盛大になつた。それは長州藩では正保年間長崎に聞役を置かれてから外國の事情を研究することとなり、その後唐人送りのため、蘭學や醫術を修業することになり、天保に至り南苑で洋學會を設けられ、その後博習堂の名を以て明倫館に入れられる様になつたもので、とにかく明倫館に於て和漢洋諸學科を、弘く併修させることとなつたが、何も國體の本義を失はぬ様にと、教則の精神に十分の注意を致しました。

軍備の方も武七文三の定則に據り、兵學の修業武藝の鍛鍊の外、特に兵器の獨立に深く考慮を費した。天保の改革に於て、明倫館の武學生には、學問武藝に非常の訓練を加ふ

ることとなり、更に兵器製造の話になると、存外に珍しい逸話が少くない。彼の天保十二年に羽賀臺に大閱兵を行ふたことは、軍學實踐の一つの證據であつた。

防長に於ける天保度の大改革は、決して容易でなかつた。産業には特に骨が折れた。農村制度の改善、治水の工事、鹵澁地の開作、窮民の救済、米穀の貯藏、漁村の保護、漂難民の救助の如きも、みなこの時に用意したものでありました。天保度の改革は、餘程長い前から徐に熟考してから、強度に斷行したものでした。當席では時間の限りがありますので、長い御話は出来ませぬが、詳細の御話は何づれも、他日に譲ることゝ致しますが、要するに天保度の改革は外科醫者が患者に大施術を行ふた様なものでした。幸に名醫であつた御蔭で、藩政治の積もる宿弊を巧に取除けることが出来ました。

それから弘化年度の仕事は、天保改革の事業を繼續して、事業の整理に努力したのです。廣く江戸並に諸藩に在る長所は、調査してこれをわが藩に取入れ、また長所ある諸藩へは、この方の秀才を選擇して文學修業並に武者修業として、諸方に派遣したものです。江戸の藩邸内には、既に天保年間設けられた有備館を改善して、一層の好結果を見るに至り、また天保にも弘化にも、他藩より文武の名流を招聘して、藩内各子弟の技能

獎勵に務めました。ことに海防の事や武器製作の事には、段々斬新の發明をしたものがありました。

それから嘉永になると、外來空氣が濕度を増して來たので、この國土を防衛するためにもどうしても渾身の斡旋をしなくてはなりませんから、新に改造された明倫館も嘉永二年に城下の中央地で落成開校となつた。その年長崎を経て種痘を行ふことゝなつた。同三年には沿海の守備を定め兵數、軍器、その外のものを取調べて、幕府に申報した。また大赦令も窮民救恤もやつたが、別に巨額の新債をも起した。同四年には世子驥尉が、徳山から本家に入籍して、敬親の嗣子と爲り萩の明倫館に居ることゝなつた。同年には土佐の萬次郎が米國より歸つて來たから、海外の事情が能く知れました。

嘉永五年九月二十二日に、後年の明治天皇様が御降誕になつたことは、近世史上に滿天下の記憶を新たにした。

同六年になると姥倉堀割に起工した。これは萩城下の二百餘年來の水害を除くため、濱崎より鶴江臺と長添山の間を切開いて小畑灣に疏水したのである。それから前年に續いて大に長門の北海岸一帯の防備を定め一朝有事の際は、一同その部署に就かれる様に、

海防のことを具備したのですが、また兵糧の引當として是迄とは別に貯穀のことを奨励させました。

防長人は宇内形勢の推移に鑒み、大日本帝國の國威を擁護するため、若し無禮の黒船の來侵するあらば、禦侮滅寇のため、事あらば速時に總動員することに準備が全く出來て居たのでありました。然るに幕府の方では何と申しても、慥に無事太平の懶夢を貪り、徒に鎖國安居を、唯一の治安術の上策とのみ考へ、忽ち長崎より報ずる夷警を聞いては、全く策の施すべきなく、愕然その腦漿を麻痺せしむるのみであつた。何故かといへば、若し戦争が起れば、幕府は直轄の軍隊を持たぬから、いざ危急の時は、誰が防戦するか、よしまた其人がありとするも、幕府には戦争に使ふべき資金がない、幕府は兵隊がない、戦費がない、武器がない、人材がない、迎も戦争のことは、幕吏の念頭になかつたのである。然らばこの低氣壓の來る氣象通報を聞いて、狼狽するのは當然のこと、その陰雨に先だち牖戸を綯繆せんとしても、臍を噬んで及ぼす、慙悔遂に絶對絶命であつた。幕府がかくの如き麻痺病に陥るならば、如何なる名案の療法があるか、諸侯もその窮狀如何を知らんとて、片唾を吞んで待望したのである。されど何日間考へても幕府には

金も力もないから、この時局を乗切る藝當は到底出來る筈はない。そこで幕府が最後の智慧袋を絞つたのは、是迄傲慢に構へた幕府の方より、有力諸侯に向つて頭を下げ、幕府に代つて働いて貰つた。弘化嘉永年間に、彼は低頭諛言の陋策を採つた。千萬驚き入つたことで、征夷大將軍たる幕府の主人が、全く匹夫に劣る笑評を受くことになつた。實に武人の風上に置かれぬ陋臭極まる次第である。之れだけは何と云はれても、決して辨解の辭があるまい。併し長州藩以下有力諸侯は、當今は日本帝國全體の安危に係るから、今更何を言ふても致方がない、幕府は幕府だが、迎も相手にならぬ、それより諸侯は諸侯の力を以て、偏にわが帝國の國威を擁護すべきであるとして決意し、防長人士は凡べてその報國的盡忠精神に躍起し、専ら天皇のため國土のために、この禦侮滅寇の眞本心を以て一同奮起したのである。他藩の美譽も少くないが、防長人はまた防長人たる特性を持つて居りました。私は防長の土地に生れて、長く生成し、何としても防長の事を餘計に知つて居りますから、その事柄も人物も知り易かつた。何にも決して郷里のために最負をして話す譯ではない。専ら先輩の話したこと、先輩並に他藩同志の書残した書類、その外一般に刊行された圖書に依り正當に防長人の眞價ある偉績を承知したのであ

る。故に私の言ふことは、私の心鏡に正直に映寫した現象を申述べたまでとあります。尙ほまた之より後に發生した事件は、引續き次回に於て申上げることゝ致しませう。

壬篇 近世防長の國策運動

近來國粹尊重の氣風盛に起り、殊に歴史の研究に勉強する人々が多くなつたのは、至極結構なことゝ存じます。本來歴史は、人生萬般の事柄を、眞實に述べるべきもので、就中我國に於ては、特に名分の明るい大道を邁進して講ぜなければならぬ。決して正しからざる虚説を書き連ねて、わが大日本の眞正の面目を冒瀆するやうなことをしては、相濟まぬ。徒らに哲學的理論を以て推斷したり、または小説者流の放縱隨意を以て虚構の記事を創作してはならぬ。この點は特に注意すべき事ですから、念の爲めに申上げて置く。

さて嘉永六年六月三日に、米國水師提督ペリーが、軍艦四隻を率ゐて相州浦賀港に來り國書を提示して、和親貿易を請ふた。幕府は驚愕狼狽して、遽に朝廷に奏聞し、諸侯にも知らせた。とにかく久里濱に會見所を設けて、幕吏と米人が應接をしたが、到底即答は出來ぬので、明年までと約し、そこで明年御返事を聞きに參るからとて、ペルリ一行

は一旦歸米した。

これ迄幕府は天下の大事を凡べて獨斷で行ひ、どこへも相談したことはなかつたが、今や蹙然自失、恰も溺没者の合掌して救助を求むる有様となつて、諸侯に江戸近海の防備を頼み、且つ對外政策に向つて急に諸侯の意見を問うこととなり、各諸侯は書面を以て時局に對する處斷意見を提案した。長州藩ではかねて長崎よりの警報、また前年にも蘭人よりの忠告もあつたから、此事あるべきは早くも豫知して、天保、弘化以來何時非常時變が起つても、驚かぬ様に軍備手當を整へて居りました。そこで幕府は江戸城に近接する、江戸灣の要地を衛戍すべく、毛利氏に傳命した。米使の渡來は六月三日でしたが長州藩邸では三日間で出兵の準備を整頓し、七日の早朝には五百餘の隊員が、大砲小銃を具して、大森、羽田海岸の陣地に着き、兵營厩舎を建造して部署に就き、立派に防備の任務を果たした。

七月には露國水師提督フリーチャチンが、軍艦四隻を率ゐて長崎に來り、同く互市を請うた。幕府は形勢の變動に驚いて急に、品川沖に砲臺を造らせ、又今迄禁止してあつた大船の製作を許すやうになつたから、藩主敬親は、内政國防等に關する雄大の意見書を、

幕府に提出して、大に當路者の考慮を促した。そこで幕府は十一月より相州の三浦郡鎌倉郡三十九箇村海岸一帶の防備を改めて毛利氏に囑命した。そこで毛利家では凡べて半永久の大兵舎を作り、上宮田村に本營を設け、多數の兵員は勿論、軍人、學生、事務家、醫者など、多種多様の人物を簡拔採用したが、後日成功をした偉才が多く集まり、有名な來原良藏、桂小五郎、伊藤博文の如きも、陣營中に勤務したのである。

翌安政元年になると、正月十六日にまた米國軍艦六隻が來て、昨年の御返事は如何にやと、回答を促した。固より幕府にはこれと云ふ成案がないので、取敢へず吏員を派出し、應急の辭柄を陳べて、例の如く窮狀を瀰縫するに過ぎなかつたか、長州並に有力諸藩は、米國人の態度を非常に憤慨して、『米國人は和親貿易を請ふと申出てゐるが、何故か武裝をして兵隊武器を澤山に乗せ、開戦の用意をして來た。若し和親を主とするならば始より商船に乗り軍裝を脱ぎ、平服丸腰の仕度で應接に臨むべき筈であるのに、和親の相談に嚴かめしい武裝を整へてゐるとは何事である、彼等の態度は畢竟誠意なき、虚喝威嚇の無禮を演ずるものである』と痛責した。當時幕吏は彼れ米人の傲慢の粗貌を視て、獅子とも虎豹とも考へたか知らぬが、諸藩志士はこれは、徒らに野生豺狼を學び、

鬼面人を嚇し居るものだから決して恐るゝには足りないが、此方は折角慎重の態度を守り、彼をして十分信服させる様な好手段を講ぜねばならぬと切論したが、二月幕吏は米人に下田箱館の開港を許し、三月三日林大學頭等は、ペルリと條約を結んだ。是年四月六日、皇宮の炎上は、何とも畏入つたこととて、幕府もこれには恐懼したと見え、早速御造營のことを、經畫斡旋することゝなつた。

此年になると、長州では往昔より經畫しある銃砲鑄造の急に迫まれて、萩の松本でも江戸の砂村でも、澤山立派に此等の武器を造り出し、いづれも受持ちの警衛地に据付けたのである。又此秋より長崎の蘭人に就き、直傳習を始められ、長州藩士は大に西洋兵式に據り、戦役に就くべき用意をした。是歲三月二十七日には、吉田松陰は、同志金子重之輔と俱に、海外の事情を探究すべく相謀り、伊豆の下田港より、米國船に搭乘し宿志を遂げんとしたが、遺憾ながら全く失敗であつた。松陰の事蹟は能く御承知と思ふから、限ぎられた時間のため拙話を省約致します。また三月二十八日には、山縣半藏（後の子爵穴戸璣）は幕使に隨ひ、蝦夷地唐太の方に行き、大に北地に於ける露人關係の事情を探知しました。

安政二年に深く印象して記憶すべきは十月二日の江戸大震災であるが、これも爰には節略して後日の御話と致します。

安政三年に深く記念すべきは、萩の小畑浦に造船所を設け、洋人の手を借らず、此方の船工だけで、西洋形の布帆式の戦商兼用の木船を造得たのである。これは曩に伊豆の君澤郡戸田浦で造つたスクーネル型を執つたのです。この年は丙辰に當るとて丙辰丸と命名された。この後萬延元年に、長崎研究の成績に依り蘭式を以て、同じ造船場にて右の様な西洋型船を凡べて防長人の力にて竣工した。これは庚申の歲なので庚申丸と名づけた。兩船とも固より風帆船ですけれども、癸亥甲子の下關攘夷の際、いづれも出動参加して戦功を現はしました。

幕府に於ても時勢に鑑み、この儘に坐視すべからざるを思ひ、長崎傳習の事また講武所を起して、遅蒔ながらも、軍隊操練の稽古を始め、また外國の學問を深く研修しなくては、外國の事情が分からぬから、安政三年に蕃書調所を設け、箕作玩甫、杉田成卿、高島五郎、松木弘安、手塚律藏、村田藏六等を教授として、大に蘭學を講習し、外國諸學科の研究に務めたのであつた。

安政四年には、貿易とか條約とか、米國人よりの申出が次第にうるさくなつた。そこで米人ハリスが下田より江戸に来て、遂に徳川將軍に謁見することゝなつた。彼は國書を呈し、貿易の内許を得たのである。翌五年正月には、前年より持越しの條約問題が頻に切迫して來たから、幕府は老中堀田正陸を京都に遣はし、條約の勅許を請ふことゝした。正陸は永く滞京して、切に懇願したが、勅許を得ないばかりか、却て三月二十四日には、正陸に勅して米國應接若し已むを得ざるときは、戦に及ぶべしとの大命を下された。幕府はこの進退兩難の急場を何とか切抜けやうと、遂に井伊直弼を起用して、大老職とした。然るに彼か僭越の專斷に據り、六月十九日幕府は、勅許を得ずして、恣に米國と假條約を訂結することゝなつた。然るに諸侯は此事を聞きて大に憤慨し、六月二十四日水戸藩主徳川齊昭、その子慶篤、尾張藩主徳川慶恕、越前藩主松平慶永、一同打連れて夜中に拘らず幕城に登營して、急に將軍に面謁を請ふたが、面謁を許されなかつたので、是非とも大老に對談したき旨を申入れたが、これも入聞れにならぬので、已むを得ず他の老中と會談し、此度幕府が勅許なくして、米國と條約を結びし不都合を、痛烈に論難したのです。

かくて朝廷は、幕府に命じ、三家及び大老の内一人に、早速出京すべしとの御沙汰を下された。然るに幕府は書面を以て、三家大老ともに政務の忙しきため、残念ながら上京の出來かぬる旨を陳べて、誰も上京せず、十月下旬に至り、老中間部詮勝がやつこのこと上京參内して、條約の事を始めて奏上した。

六月二十一日幕府は、これ迄長州藩が相州衛戍をして居たのを罷め、改めて兵庫海岸一帯の地を、凡べて警備する様にと命じた。それは從來幕府が、外國人に對し何事も重要な問題は、凡べて幕府の方から取極めて行ふから、江戸でなくては決せぬ、幕府は朝廷より、何も彼も委任されて居ると申したが、さて此頃の幕答が外國人には不安を感じた。それは何も朝廷に伺はなくては、勝手には極められぬと申す様であるから、それなら外國人の方で、直接に京都に參り、勅意を伺ふ方が宜しかろう、さるからには、この後外國の船を、すべて攝海の方に乗入れることにすると申出た。そこでそれは大變だといふので、そこで急いで攝海防衛といふことが大問題となり、幕閣でも細心熟議の上、是非長州藩に攝海の警備を頼むと言ふので、相州の戍兵を引揚げて、兵庫一帯の地に移すことゝなり、八月には朝廷から、毛利氏に特に密勅を下たされ、慎重なる聖意を以

て、深く御信賴がありました。

老中間部詮勝が京都に来てから、在野の志士どもが、幕府の外國條約締結の不法を痛論し、尙ほ内外時事を非難する者が多くなつたのを聞いて、漸次此等の人々を逮捕するに至つた。所謂瓜蔓生の禍にして、その災難は追々に廣がつて後ちに戊午の大獄となつたのである。

京都に捕らへれしもの、又江戸その外に捕へられしもの、いづれも投獄せられた。梅田雲濱、飯泉喜内、小林民部、日下部伊三次、橋本左内、頼三樹三郎、鵜飼吉左衛門、同幸吉、安島帶刀、茅根伊豫之助、吉田松陰など、その重なる者で、當時松陰は遠く萩に居たので、その家に禁錮せられ、十二月になつて藩獄野山屋敷に投ぜられました。

安政六年十月七日、頼三樹三郎、橋本左内、飯泉喜内が斬刑に處せられ、同二十七日吉田松陰も、同く小傳馬町獄内に斬られ、同志等その遺骸を受けて、千住小塚原の回向院の墓地に埋葬した。その前後に獄を斷せしもの、斬刑あり、遠流あり、追放あり、重輕すべて數百人の多きに及んでゐる。

萬延元年の正月には、幕使村垣範正、新見正興等が、米國に行くことになつたので、長

藩士北條源藏即ち後の伊勢煥が、その行に隨伴して、米國に赴き、多くの新知識を得て歸り、後日工學方面に盡す所が多かつた。その巡遊中の事を詳細に吟詠したる詩稿に、

『米航詩記』がある。これを讀めば、斬新頗る喜ぶべき佳作が多い。

三月三日には、水戸藩の浪士十七人が、江戸の櫻田門外に於て、大老井伊直弼を要殺した。直弼は固より資性穎敏に、才幹見るべきものがあつたに相違ない。されど何分頑傲剛愎の習癖が甚しいから國家を誤る恐があると、何人にも喜ばれなかつた人物であるが、其非業に斃れたのは、彼の條約一件に對する大不敬罪その他に就いて、天人共に許さざる逆行の少なからぬためであつた。

癸丑甲寅以來、時局は種々回轉して來たが、また曆が文久となりますと、活劇の場面もすつかり變つて、片々斑々相續いて眼球に映ずるものは、殆ど應接に遑なきほどに代謝するのです。

文久元年の正月、長藩主敬親は、目下海防の要務多忙のため、東觀の期を緩くせんことを、幕府に申請した。二月には、藩内に海軍局を開設して、爰に修業課目を定めた、それは造船術、運用術、航海術、艦砲術であつた。

當時何たることか、朝廷の聖旨が幕府に通徹せず、又幕吏の言行が、常に柄鑿して往々朝議に違ふたのは、天下民衆の遺憾とする所であつた。敬親はこの事を、最大の憂患とし、何とぞ幕府をして、能く朝廷の聖旨を奉體せしめ、朝幕一和以て益々國運の展開に進まれんことを冀ひ、爰に封事を捧呈して、公武の間に周旋すべく進出することゝなつた。而してこの重大なる使命を負ふべき適才を、藩士中に物色して、當路の會議に附した結果、遂に長井雅樂をしてその選に當らしむることゝなつた。雅樂は一旦辭退したが許されず、出發するに先だち、詳に藩主の眞意を深受し、それより長府、清末、徳山、岩國の各支藩主を訪ひ、その賛成を得て、四月末日藩地を出發し、五月中旬に着京して正親町三條實愛に面謁し、この度上京の挨拶を陳べて、公武間の周旋に務むべき旨を述べ、それに就いて更に航海遠略の新案を力説したので、實愛は非常に感心してこれは必聖上に奏聞すべしとまでに請合ふてくれた。それより諸有志の間に斡旋し、六月になつて江戸に赴いた。

これより老中久世廣周また安藤信正に面接して、偏に公武一和の議に、専心努力すべきを説き、殊に航海遠略の案に至りては、頗る幕閣の主腦部を喜ばし、久世等老中の要部

は、深く長井の才幹辯論、且つ提案の理由宜しきに感動し、長く江戸に滞在して、國事に周旋し呉れる様にと懇に要望した。

然るに雅樂は、政務の重責を一身に引受けて、諸方に奔走するので、迎も落付いては居られぬ、權門諸家を尋ねるやら、京都に急行するやら、何としても寢食を忘るゝほど要務に忙殺されてゐる内、好事魔多しとやら、爰に折角の重任に對して、俄に一頓挫を起すべき厄難が生じた。

それは何かと申すに、他藩の攘夷論者の主唱に長藩の有志も加はつて、長井排撃論が起つたのである。その説く所は、彼れ長井は勤王防國の議を變じて、佐幕開港論者となつた、彼は全く一身の榮を需めて、國家に禍を嫁するものなりといふにあつて、激論囂々速に彼を要殺すべしとまでに暴發した。如何に反對者の嫉妬より起た彈劾に原因すといへ、元來彼の行動は藩主以下重要同志の協賛を得て、凡べて在上の指揮を受けて、斡旋したので、決して彼が私に處置したのではない。されど衆口は金を鑠かし、萬犬また實を傳ふとやら、雅樂は誣告のために、氣毒ながらその罪を問はれ、文久二年六月、歸國を命ぜられた、雅樂に於ては此度のことは、凡べて國家のため、至誠を盡くしたのであ

るから、寸毫も他人を怨むるところはないと、専ら責任を一身に引受け、萩の自宅に謹慎、閉居して、靜に公命を待つたが、歲月勿々忽ち翌三年に至り、國論一變の已むなき情勢のために、二月六日終に自宅に於て自盡を命ぜらるゝことゝなつた。當時に現在せし年少氣銳の輩は、雅樂の一死を以て、如何に感視したか分りかねるが、昭和の今日より徐に精思するに、國家のため、惋惜に堪へない痛恨事で、實に一長城を失ふた感がある。私は他日長井のために、別に一文を草して、彼の眞意を推論したいと思ひます。朝幕一和のためとて、皇妹和宮はいよいよ、大將軍家茂へ降嫁あらせらるゝことゝなり。文久元年十月二十日、京都を發輿になり、十一月十五日江戸に着輿あらせられた、當時としては和宮降嫁のことは、如何にも重大事件として、餘程世論がやかましかつた。文久元年十二月には、幕使が歐洲諸國に派遣さるることゝなつたので、長藩士杉徳輔が（後の子爵杉孫七郎）その一行に隨從して、諸方を巡遊することゝなつた。これもまた新しい奇事珍聞を齎らして歸り、前の北條源藏に續いて道中吟詠の詩稿を残して居ります。

この頃は種々の事件が、繼續的に發生するのでしたが、翌二年には、五月に大原勅使が江戸に下向し、十月は三條勅使が、同く江戸に下向した。それから十一月十三日に、蒲田梅屋敷の事件が起り、同十二月には御殿山燒撃の事件があつた。その外複雑した話も無論多かつたが、短時間では述べ盡されませぬ。文久も元年二年の繁雜を通り越して、いよいよ三年になると、時局向の出來事は、次第に多く發生した。

正月五日には吉田松陰、小林民部、頼三樹三郎等の遺骨を、千住の小塚原回向院の墓所から、若林の大夫山に改葬した。この小塚原の方は、極悪人の死骸を埋めた所であるから、勤王志士の墓とすべき場所でない、若林の地は、長藩主毛利氏の所有の火除地として、古くからの下屋敷たる淨地である。この時高杉晋作、山尾庸三、伊藤俊助（博文）その外、多數の同志相謀つて、改葬始末を十分鄭重に斡旋した。

將軍家茂は、かねて毛利氏よりの切なる勸告を諒とし、寛永以來久しく廢絶した謝恩上洛を決定して、旅次平安、三月四日に入京した。三月十一日は、天皇賀茂神社に御親拜あらせられ、將軍家茂も、諸侯を率ゐて鹵簿に扈從した。また四月十一日は、石清水八幡宮に御親拜あらせらる。この時將軍は、病氣と稱して扈從せず、之がため慶喜が名代

として扈從することゝなつたが、これも途中より急病と稱して引返した。これは不敬千萬言語道斷であつた。折角聖慮を傾けさせられ、時節から攘夷祈願國土安寧の御思立にて、特に鳳輦を進めさせられたのである。家茂、慶喜の輩は何と思ふたか、實に武臣の風上に置かれぬ心得違ひの木偶人と評さねばならぬ、まして彼を輔佐する。幕吏の心事に至つては沙汰の限りである。

かねて朝廷より五月十日を以て、攘夷期限と定められたが、偶然にも此日に、米國船が下關を通過したので、早速長州砲臺よりこれを打拂うた。同二十三日に佛國船を、同二十六日に和蘭船を、それからまた六月朔日に米國船を、同五日に佛國船を、それぞれ砲撃した。いづれも壯烈の戦闘を交へたのであつたが、この五回の合戦も澤山の佳話を傳へてゐます。

この年五月に記憶すべきは、伊藤俊助(博文)井上聞多(馨)山尾庸三、野村彌吉(井上勝)遠藤謹助の五人が英國に遊學したことで、他日歸朝後に於ける、彼等に關係した話題としては、恰く世人に知られたるものが澤山ある。

七月には朝廷より攘夷御親征大和行幸の御沙汰があつた。七月長州よりは、益田親施等

が大兵を率ゐて入京し、宮門を警衛することゝなつた。八月には脫藩諸士どもが、中山忠光を擁して大和五條に至り事を起すことゝなつた。

佐幕側の在京せる重要人物どもは、遽に密偵を得大和行幸よりして、忽ち事變の生すべきを恐れ、八月十八日敢て勅命を矯めて有志公卿の參朝を罷め、長藩兵の宮門守衛を罷めることゝなつた。親施等は朝命の暴斷を訴へたが、此上強く争ふべきでないから、已むを得ず悉く守衛兵を撤退して、凡べて京都を引上げ、長州に歸陣することゝした。

有志公卿の中には、長州人と全然同意の人も随分多かつたが、特に七人だけが、凡べて進退を共にしたいから、是非とも長州まで一緒に行くことと云ふて同行した。それが七卿落と云はれたのである。その名前は三條實美、三條西季知、東久世通禧、壬生基修、四條隆謨、錦小路頼徳、澤宣嘉であつた。

中山忠光等の天誅組は、大和に兵を起し、義舉に及んだが、七卿は長藩兵に衛られて、防州三田尻なる毛利氏別邸の招賢閣に入つた。それよりまた平野次郎、南八郎(河上彌一郎)等が三田尻に来て、澤宣嘉を勧め、俱に但馬に至り、義兵を擧げんとしたが、百事意の如くならず、畫策みな敗れて畫餅と爲つた。

この年十二月長藩主敬親は、諸臣に命じて陳情書並に奉勅始末を作り、藩士井原主計をして京師に齎らし朝廷に上つり、猶又幕廳にも回申すべきことを命じた。然し孔道廢頽荒煙榛草、迎も容れられる模様がなく、闔藩痛恨に満ちた。抑も敬親がこの文言を上つるとなつたのは、防長總體の民衆が、癸丑甲寅以來、百萬一心、専ら勤王報國の精誠を竭し、偏に忠節を抽て、日夜粉骨努力し、毫も昔日と變はることのないにも拘はらず、八月十八日突如として長藩の宮門守衛を罷められ、反幕公卿の參朝を停められ、暴風惡雨が俄然青天白日を襲ふて、赫々たる不磨の光明を蔽遮する事となり、如何に冤罪を訴えても、君側の者が全く聽く耳を持たないから、據なく多年の忠功をこの兩書に詳述して陳訴した次第である。

元治元年になると、前年より持越しの、雪冤の運動が、非常に激烈に現はれたが、京師側からは、殆ど聾者啞人同様何の回答もない。そこで長藩諸隊の志士等は斯くなる上は上京して口頭で歎願するより外はないと決心して一同無斷で續々出發することゝなつた。これを管督するために益田親施、國司親相は、來島政久等の部隊と、久坂義助等の部隊を統率することになり、また福原元備は後より東上して、諸隊有志の行動の亂れざ

る様に監視し、且つ別に歎願の手段を執らんと努力した。

その内に水戸藩では、攘夷派の有志が常陸の筑波山に據り、時勢を慨き義舉を企て、この方面の志士は、追々他方面に移動して、ますます紛糾を極めることゝなつたが、翌年の春、武田耕雲齋以下數百の同志が、越前敦賀にて、悲惨の刑戮を受けたのは、何とも遺憾至極であつた。

六月五日には、幕吏の行動を援護する新選組近藤勇等數十人が、京都に潜伏せる勤王志士を、一網に打盡くさんとして、祇園祭の混雜に乗じ、三條の旅舎池田屋に斬込んだ。此時長州藩、肥後藩、その他の同志が集會して、國事を密議する最中であつたが、不意の亂入であつたから、勇壯に奮闘した甲斐もなく、衆寡敵せず、残念にも多くの忠節の士を失ふに至つた。此事が忽ち京街に喧傳したから、曩に滯京して居る、長藩其他の勤王同志を、彌が上に憤怒せしめた。實に驟雨に先だつ黒雲で、近日の態勢急激に悪化したのは、全くこの池田屋事變であつた。このことは深く考へ置くべき所である。

元治甲子は、如何にも厄年であつた。英佛米蘭の四國は、連合艦隊を編成し、前年の復讐として、長州に向けて、近日に乗込んで來るとの警報が來り、また京都では、如何な

る事變が、突發するか分らぬ。防長人としては、前門に虎を逐ひ、後門に狼を拒くの場合となり、二河白道も管ならぬ窮狀に苦むことゝなつた。

さて京都の事變は七月、下關の攘夷戰は八月であつた。その顛末をあらまし申し述べませう。

元來防長人の唱道する本旨は、我等は勤王報國の純正なる行爲のため、頻に上京陳情すべく願出たのであるのに、却て入京を拒絶せられるのは、全く防長人は幕政の障礙物であるから、これを窮地に陥れて、速に滅亡させたならば、幕政のためには無敵安泰であらうとの邪見を以て、縦からも横からも、長州いじめに餘地を存せぬほどに、不倫慘刻であつた。親施、元佃、親相等は、みな京都郊外に留つて、朝旨を待つてゐたが、更に好報はなく、ますます苛刻の返報のみであるから、此上は據なく臣道として武士道として、爰に忠諫の誠意を盡くし、已むなければ一死以て國に報ゐんのみと衆議を固めて、斷然闕下に伏奏して、丹心を陳上することゝした。

さて七月十九日早朝、國司親相は嵯峨天龍寺を發し、來島政久等部隊長部下の強力諸兵を引卒して、西陣を過ぎ中立賣門より蛤門に入り、佐幕諸藩兵と交戦して、互に死傷を

出したが、政久は敵彈のために斃れた。

大山崎の天王山に滞陣せる眞木和泉、久坂義助、入江九一、寺島忠三郎等文事派の一隊は、朝發して同く哀訴歎願の誠意を抽て、宮門に到り請ふ所あらんとしたが、門前にて幕兵の大部隊に遮られて入ることが出来ないから、鷹司前關白の邸に入つた。時已に敵味方の諸兵既に戦酣で、久坂、入江、寺島以下勇壯の諸士、悉く躍進奮闘したが、到底勝算の見込がないから、久坂等は最後の覺悟を定め、絶命の吟詠遺書などを認め、邸内に火を放ち、一同火焰の中に列坐して、靜に宮闕を拜し從容血刃に伏した。

福原元佃は前夜より伏見を發し、同く歎願の目的で中村清旭、太田市之進等の諸隊を率ゐて、伏見街道を進み、藤森に至つて佐幕敵兵のために妨げられ、元佃は負傷した。この日鷹司邸の兵發、猛煙の裡を脱却して、天王山に逃れ退いた眞木和泉の一行は、翌日山上に於て、同志と共に憤慨自刃した。當初この入京歎願は、事成らば天朝に報ひ、若し成らざればこれは天運であるから只一死あるのみと覺悟して出發したのであるから、死んだ者は皆見事な花々しい戦をして快く輦轂の下に仆れ、残つた者は後圖再擧の爲めに隊伍堂々として長州に歸還した。

さて京都事變は全く失敗したが、外國船隊襲來の方は如何であつたかと云ふに、彼等は長藩人の京都失敗のことを聞いて俄に氣勢を高め、次第に來襲の評判が近づくことゝなつた。その頃前年英國に留學した、伊藤俊助と井上聞多が、彼の地にて四國の連合軍が長州を襲撃する噂を新聞紙で讀んで非常に驚き、これは大變だ、故國のために何とか救護策を圖らなくてはならぬと、急に英國から歸朝して長州に着いて見ると、既に京都の變動で破れ多くの名士を失つた上に、宮闕を騒がしたから、長州は正に朝敵である、幕府から天下に觸れ廻し、これを機會に佐幕派は、盛に長州排斥を主張して屢々攻撃の氣勢を煽り、有ること無いこと、捏造の曲事を奏聞して、遂に長州征伐の御沙汰を發せらるゝことゝなつた。又かゝる長州の厄運を監察した外國人等は、好機乗ずべしと、押掛けて來たので、長藩要路の苦心は、意外に大であつた。七月二十三日には、征長令が發せられ、同二十五日幕府は、長藩邸の江戸、京都、大坂、長崎、その他にあるものを悉く沒收し、また江戸の藩邸に居残つた長州人男女、老人、小供、病人に至るまで、悉く拘囚した。八月朔日には、幕府は、更に近日長州を征伐すべき命令を諸藩に傳へ、八月三日には、將軍家茂が征長のために、自分親から進發する旨を公布した。この大厄難の

最中に、外國談判は破裂して、八月五日六日遂に下關に於て、長州兵は英米佛蘭四國の連合艦隊十八隻と、戰爭することになつた。伊藤、井上が英國から歸朝したのは丁度この時で、長藩が内外紛亂大國難の中に立てる今日、諸外國と交戦するのは、非常な不利であるから速に止戦和議を圖るべしとの協議が熟して、高杉晋作、伊藤俊助、井上聞多等が、數回外艦に往復して、艦將等と懇切に會談の結果、都合能く戰爭を止め、外艦はそれ〴〵立去ることになつたのである。

長藩ではこの藩内の大動搖のために、主戦派と恭順派の二黨が出来たが、この際主戦派の政府員は、責を引いて辭職し、恭順派が代つて藩政府を組織することとなつた。これは九月の頃で、十月には主戦派の議論がまた〴〵烈しくなり、到底幕兵の來襲は免がれまい、當方に於ては、今日より諸隊に對し十分の準備を爲すべしと警告に勉めた。併し幕府の征長軍は、十一月十六日總督徳川慶勝が廣島に來り、十一月十一日副總督松平茂昭が小倉に着いた。それから廣島に幕府の老中大目附以下の諸役人が來て、所謂廣島應接が始まり、恭順政府は益田、福原、國司、三國老に切腹を命じて、首級を在廣島總督の實驗に差出した外に四參謀、宍戸眞澄、竹内勝愛、中村清旭、佐久間義濟を斬刑に處し

た。十二月十九日にはまた、前政府員七人を獄中に斬り、同二十五日には清水親知を屠腹させた。

世人は主戦派を正義黨と稱し、恭順派を俗論黨と呼んだ、正義黨の領袖高杉は深く時の切迫を慨し、一旦九州に脱走したが、また歸藩して、國運回復のことを深慮した。恭順派の代表者が、廣島の幕吏に對して執つたことは餘りに不手際であるから、高杉等の同志は、速にこの俗論政府を打破り、防長の國粹に基き、快戦した。眞の防長正義を鼓吹して國論を回復統一すべきであると決斷して。廣島では接幕談判の紛糾せる最中に、藩地では主戦派が、俗論黨を撃つべく諸兵配置に忙しく、恭順政府でも既に諸隊兵追討の軍を各所に出動して、夫々防衛することゝした。

元治二年即ち慶應元年の正月二日には高杉晋作、伊藤俊助、福田良輔、石川小五郎、森重健藏等が遊撃隊を率ゐて、下關に義兵を擧げ、討奸檄を傳へて四方に宣布した。然るに征長總督は、舊臘より幕吏を長州萩に遣はし、城内城外詳細に狀況を偵察せしめ、これなら無事靜謐で安心じゃといふので、正月四日に征長軍の引拂を命じて、悉く廣島から撤退した。二月の二日には下關で、正義、俗論兩派が戦争の幕を開いたのに、それか

ら二日も後れた四日に、幕軍は安堵を祝して撤退して居る。實に頓珍漢な話である。これから諸方に於て戦争が起り、諸隊兵は南方より進むので南軍と稱し、恭順派の兵は北より押出すので、北軍と呼んだが、二月十五日には諸隊が萩に入り、こゝ一箇月半ばかりの戦争もこれで片付いた。

對幕談判も一先づ片付き、内訌戦も平定して、これで日出度いと、城中大會議の後ち二月二十二日に、藩主敬親は世子、支藩主重臣を會し、祖靈社の臨時祭を行ゐ、大に祈禱並に感謝の式を行つた。これより藩政府は更に正義派の名士を以て組織を改むることゝなつた。二月二十七日藩主は、山口に至り留まつて永住することゝなり、随つて藩政府も萩を引揚げて山口に移轉した。

四月十四日に幕府はまだ佐幕諸侯の議を容れて、長州再征の事を決し、紀州藩主徳川茂承を總督として、三十六藩の有力諸藩に令し、それぞれ部署を定むることゝした。

いよいよ再度の征長で、兵火を交ゆるまでには、その前用意が容易でない。幕府の方も役割を以て、澤山の役人や兵隊どもが、廣島に繰込んで來たが、長州の方でも、重要な人物その外特別の有志家が、廣島に押掛けて、それぞれ下準備の運動に務めた。長州

側からも幕府側からも、沙汰物の取次や意見書の送達を直接にせず、何事も廣島藩を仲介して、交渉を進めたものです。十一月下旬に至り、幕府大目付役永井主水正より、長藩の正使宍戸備後助を國泰寺に呼出し、爰に訊問應接のこととなつたが、宍戸はその訊問箇條に付、一一詳細に明答したのである。此時の辯論は七時間以上であつたと云ふ。同月また宍戸等その外を召致して、再度の談判となり、此時は別に長州より差遣した有志も參席したので、長時間に涉り毎日夜に入つたが、一回二回の應接では埒は明かず、談判は翌二年に持ち越したのである。此時は長藩の副使小田村素太郎も同様に苦心して、辯疏解説に務めたのである。二年の五月また第三回の談判を催した。これまで宍戸が非常に奮勉したが病氣のために小田村が代つて難問の辯解に當つたが、幕府方は長州處分のため、裁許状なるものを渡さうとし、長州の使節は飽くまで受取らぬと頑張る。何故に頑張つたかといふに、その中には種々厄介な事項があるが、特に困るのは、削封の箇條がある、そこでこれを受諾すると大變であるから巧に迂避して裁許状の承諾し難き次第を力説したのであるが、この力説に對し幕吏は好案の施すべき道なきに窮し遂に不審の趣ありと稱して長藩の正使副使兩人を拘囚した。

この時征長總督も同副總督も、それぞれ廣島に來着し、合議の末、遂に六月八日を以て征長進軍の期となす旨を發令した。これから愈々開戦となり、大島郡の戦争は、六月七日に始まり十九日まで掛つた。藝州方面の戦争は、六月十四日に始まつて八月七日まで續いた。石州方面の戦争は、六月十六日頃より七月十八日頃までであつた。小倉方面の戦争は六月十七日より十月七日に至つた。この戦争は結局、幕軍の大敗で長軍の全勝であつた。

長軍は精銳の強兵なり、幕兵は訓練不足の烏合の衆であるから、勝敗は最初より分つてゐたことで、彼れ幕軍が敗走休戦の申出をしたのも已むを得ぬのであつた。

將軍家茂は征長軍を指揮するため、江戸より大坂城に移つてゐたが、七月二十日に病歿した。そこで喪を祕して戦士を勵ましたが、何としても敗戦は争はれぬ事實であるから、それから嚴島の談判となり、勝安房も辭窮して東歸した譯である。この戦争も談判も脚色が複雑して居るので、雙方出動の實狀は恰も長尺の活動映畫を見る感がある。先づこれが簡略ながら征長事件即ち四境戦争の顛末である。

文久三年八月より慶應元年、同二年、同三年十月に涉る五年間の大事變が、それぞれ回

轉して行つた、京都堺町門の變、京都蛤門の動亂、下關の攘夷戰、長藩の内訌戰、四境の戰爭、いづれも大難病であつたが、國を治め病を治むる名醫の力で、無事に根治した、あとに、討幕と申す一つの癌腫が残つた。

防長人はこの五年間、幕府の暴威に依り、全く四境を鎖されてゐたから、外部に對し公然と何を爲ることも出来なかつた。併しながらこれは表向で、内證では必要があれば何所でも往來して、藩内の諸事萬端を辨ずるに差支はなかつた。これからこの五年の間に藩内で行はれたものの概況を述べる。

癸亥八月防長人が退京歸還の後は、専ら人心の結合に務めた。また青年の國粹的教育に力を盡くし、隊士の武育を奨励した。竊に人を長崎に遣り、荐りに外國知識を取入れて兵器製造を國內に開始し、専ら兵器の獨立を圖ることゝなつた。彼の伊藤、井上等に洋行を命じた目的も自からその邊にありしことゝ知られる。

元治甲子は國事紛糾、如何にも杞憂多き時であつたが、明倫館以下の郷校では、子弟教育のため十分に根本教程に注意し、特に兵式操練の如きは、その指導者を勵まして、各所の訓練場に於て深く有事の變を慮つて大訓練を行ふた。これは一般青年をして安逸に

流れしめぬ様勵ました譯である。

乙丑の年は、内訌戰が濟んでから、一先づ小康を得たが、將來のことはどうなるか、決して油斷安心はならぬ。併し山口へ移鎮となつたので、これから山口の方へ強力を傾けることになり、山口の明倫館を改造擴張した。翌丙寅また翌々の丁卯にも跨つて、學政振興の事業に着手した。長州征伐が長引いて、暫く混雜したから、その間少しても國人が怠氣を生じてはならぬ。内輪の綱を締めて置かねばならぬといふところから、出征軍人に負けぬ様に銃後の防長人に、高壓的の協同訓練を與へたのである。

戦場の軍人は國家のために、命を惜まず奮闘して居る。然らば防長の留守を衛る一般人も之に劣らぬやう、懸命に奮發せねばならぬ。學問も大切だ、武術も大切だ。併し生活の源泉となるべき農作、漁業、林業、鑛業その他大小の生産業にも、同じく國家のために努力せねばならぬ。

何人も一生懸命になると、なかなか強いもので、山口萩の兩明倫館も陸軍學校も海軍學校も越氏塾も好生堂も洋學寮の盛大に興つたのは、凡べてこの戦時中であつて、學科は和漢洋の諸課目を併修したのである。

慶應時代に歌はれた、防長文化の眞影は、實にこの時に映されたもので、沖原並に福田口の銃砲製造場、同江向また勝坂の分工場、霧口、中津江、天花の火薬製造所、小畑の造船所また反射爐の如き、いづれも此際専ら活用せられたのである。私共は少年の事で、當時の御役には立たなかつたが、その頃目撃した光景、また先輩から聞及んだことは、深く頭腦に浸込んで、今に目前に浮び出る様に覺えて居る。

諸種教育の中、この際珍しいのは算術を奨励して、山口に頒曆所を設けたことで、これは大村益次郎、松本源四郎、弘鴻之允の努力であつたが、その内専門として成功したのは弘鴻であつた。戦時中は、伊勢曆の頒布がないから、農家漁家の便を謀るために曆を作つたものである。又醫術や藥劑に注意を拂つたのも、頗る面白い理由がある。即ち今は戦時中であるから防長人の生命は一人でも惜むべき時である。この非常時には、金よりも玉よりも別して惜い生命であるから、生命を長く健かに保つために、醫療のことに心配したのである。で防長全體の醫者を勵まして、弘く療病のことに努力させ、且つ病室を設けて出來得るだけ、患者を收容する様にした。又現に戦傷病者が續々出來るので、大規模の病院も、設備されてそれは餘程繁昌した。

易經に尺蠖の屈するは以て、伸びんことを求むるなりとあるが、曩に嘉永癸丑、武相諸灣を警戒してより、文久癸亥、宮門守衛に至る屈指恰も十年を數へ、禍福顛倒して、忽ちこの厄運に會ふ。その得喪の乗除するところ、天道またまた量るべからざるものがある。防長人は恰も尺蠖の如く、この五年間を屈して、戊辰の正月を待つて忽ち伸びたのでこの五年間を徐に靜思したら、防長人の誠意が酬みられて、後日好運の果報の多かつた天運循環の理が判る。

古來戦時の籠城長きに涉り、數年に及びて開城せるものもあつたが、わが防長人は慶長以來二百數十年の間、防長と稱する最大堅城に籠城し、しかもこの城郭は累世先輩の猛訓練に従ひ、文に武に庶民階級を平等せる、百萬の大衆が一致協力して、強守したる眞に難攻不落の金城鐵壁の大本營であつた。武田機山が

人は城人は石垣人は堀なさけは味方あだは敵なり

と詠じたも、洵に至言である。國人の和と衆心の合を得たならば、實に強國である。しかも防長人は古き昔より、専ら勤王報國の至誠を發揚しながら、靜に沈黙を守り、時機を待てるもの、實に二百幾十年であつた。されど防長人は今更關原の舊怨を報みんとし

て幕府に對したのではない。防長人は決して左様な小度量の野武士ではない。どこまでも天下の正道に據り、人道上の義心より發した義舉で、これは寧防長人の武道の爲に誇りとする所であつた。それ故に甲子の京變も、丙寅の征長戦も、決して防長人より端を啓いたのではない。凡べて敵方即ち幕府側より、無理難題を設けて、先方より干戈を執つたもので、此方のは已むを得ざる正當の防衛であつた。

防長人の二百六十餘年間長期の籠城は、眞に隱忍持久能く來るべき好機を待つたので、丁卯の冬至節は一陽來復の目出度き消息を齎した。風も烈しく浪も高いか知らぬが、空しく夜塘水を辱んで登龍を捕逃がしてはいかぬ。全機活潑の處、石火電光猶ほ是れ遅しの強力氣分で防長人は邁進したのである。

われ等は防長人たるが故に、善く此言を爲すと申さるゝか知らぬが、苟も帝國全般の歴史を精細に研修する人あらば、何國の人でも、直に同感して、わが説を是認するに相違あるまい。

癸篇 維新事業を構成せる防長精神

歴史の本領は、人間が銘々その時代その場所に行つた、禍福成敗の事實を眞率に物語るべき筈ですから、決して偉大なる人の話ばかりに限る譯ではない。案外平凡の常事と思はれたるものが、いつしか却て重要事變の起因となり、やがて一代興亡の脚色を現映することが多い。それ故に史中の眞價を知らんとするには、内外となく細大となく、一般事蹟に對して、深甚の考察を要する譯なのであります。

さて暗澹たる頑陰に蔽はれた、慶應の天地も、三年の十月に入り、妖雲忽ち消散せんとする祥景となつた。即ち勤王派の運動が、中央政府を動かし、正義奉公の至誠が、天地を貫いて、畏くも十月十四日を以て、長薩二藩の代表人を朝廷に召され、討幕の密勅を賜はつた。幕末の形勢が斯く相成つては最早如何ともいたし難いから、そこで征夷大將軍徳川慶喜は、即刻上書して、將軍職を解き、政權を奉還することゝなつた。

十一月に長藩は、薩藩と協議を進め、上京の準備を整頓し、同月二十三日に薩兵が先づ

入京したが、同二十九日には、長藩からも上京の兵隊が、攝州西宮の附近、打出濱に到着することとなり、十二月に入ると、長藩兵は隊長參謀等に引率されて、悉く上洛し、朝廷の御内議、凡べて決行せられて、十二月九日王政復古即ち大政維新の大號令を發せらるゝこととなつたのは、洵に感激極はまる大慶事であつた。而して翌十日には、長藩家老毛利内匠が兵を率ゐて入京、直ちに參内を許され、優渥なる褒詔を賜ひ、藩主の官位を復し、且つ速に上京すべき旨の難有い御沙汰を被つた。

即ち去る癸亥八月より五年間の厄雲が、今日初めて晴れ渡り、青天白日の喜を仰ぐこととなつた次第で、長藩兵が、朝命に依つて宮門守衛の任に就いたのに引かへ、徳川慶喜並に彼に附隨する要人どもは蒼惶として悉く京都を退き、大坂城に引揚げることとなつた。

然るに慶應四年即ち明治元年戊辰の正月三日に、徳川慶喜は麾下の諸兵並に會津、桑名二藩の兵に命じ、干戈を擁して大阪から北上し、敢て哀訴せんとしたから、長藩兵は朝旨を奉じて、薩、土兩藩の兵と俱に、これを迎撃つこととなつた。鳥羽、伏見兩所に激戦のあつたのは此時である。而して翌四日には、仁和寺宮嘉彰親王が征討大將軍を命ぜ

られ、錦旗節刀を賜ひ、正々堂々の皇軍を向けられたので、佐幕兵は諸方面とも大敗績となり、同七日慶喜は大坂城を、尾張、越前の二藩に託して、自分は會津、桑名、松山諸藩主その他を従へ、竊に大坂から汽船に乗つて、海路江戸を指して逃歸した。

朝廷では、是より諸官廳の制度事務を、着々整頓せらるゝこととなつたが、一方では又幕兵征討のため、諸方面への官軍進出が忙しくなつた。東海道、關東、東北地方に向へるもあり、又山陰、北陸、東山に向へるもあり、甲州の方でも、武總方面でも、江戸の上野や上州、野州でも戦争があり、奥州の各地の戦争では、別けて會津に激戦が續き、それから越後の長岡でもなかなか激戦があつた。

三月十四日に天皇は、南殿へ出御になり、公卿諸侯を率ゐて、天神地祇を祭り、五箇條の御文を誓約あらせられた。四月二十一日、有栖川大總督は、江戸城に入つたが、關東東北の各地は容易に鎮靜せず、五月十五日東叡山屯聚の賊徒を討破つたが、餘賊は奥州東北諸方に散遁して、蘂蔓意外に猖獗を極め、漸く十月に至り東北の戦が止んで紛亂は先づ平定した。

七月十七日には自今江戸を改めて東京と稱せらるゝこととなつた。そこで九月八日詔し

て、明治と改元せられ、茲に一世一元の制を定められ、九月二十日には、聖駕京都を發して、江戸城に入御になり、此地にて諸般の親政を行はせられ、十二月八日また東京を發して、京都に還幸あらせられた。

この年長藩の、江戸關東奥羽東北それぞれの各戦地に於て奮闘鏖戦した戦功は、頗る偉大で、この期間に努力した苦戦の軍功勳績の物語は、多量にして且つ面白きものが多いが、その詳細は、他日の好機會を待つこととする。

維新の大業は、頗る難事が多かつた。明治二年正月の二十三日には、長藩主毛利敬親、薩藩主島津忠義、佐賀藩主鍋島直大、土佐藩主山内豊範等が、連署上表して、封土人民を奉還せんことを請ふた。これは數百年來、歴代襲封した領土を無條件で、朝廷に返還することになるから、難中の難である。若しこれが他國であつたなら、大戦争なくては到底出來ぬことであるのを、平穩に奉還の始末を完了したのは、全く勤王惟一の精神に發したる、大稜威の徳恩と謂はざるを得ない。二月二日には朝廷、毛利元就勤王の勳績を追感せられ、その廟社に豊榮の號を賜ふ、仍て豊榮神社と唱ふ。後日社格を昇せて、別格官幣社とされた。

三月七日天皇東幸あらせられ、途次伊勢太神宮に親拜あらせられ、三月二十八日聖駕東京城に入る。

昨年戊辰正月、朝敵幕府の討伐あつて以來、本土の東北大部分に對して、長戦があり、この朝敵は撲滅平定となつたが、舊藩の遺臣等は朝命に尙ほ從はず、品川灣にある徳川氏の軍艦八隻を奪ひ去つて、陸奥海に向ひ脱走した。それから彼等は、二年の春、蝦夷地に據り、箱館五稜郭その他に戦争が起り、随分激烈の攻戦數回に及んだが、五月十八日に至つて、賊兵悉く降伏して全く平定することとなつた。

九月四日に兵部大輔大村益次郎が、京都の旅寓に於て、賊のために襲はれて負傷した。直ちに鄭重なる手當をして、一同その治療に盡力したが、折角の心配甲斐もなく、病狀次第に重患に陥り、遂に十一月五日を以て、永眠することとなつた。時正に維新の大改革に際し、この偉人を喪ふたのは、寔に國家の大損失である。大村は當時これに代はるべき人物がないほど拔群の人材であつたが、賊輩が暗殺逆意を構へることになつた原因は何であるかといふに、主として兵制改革意見の反對であつた。大村の意見は第一に從來の様な、武家系圖に誇る青年士族のみを兵隊にしては安心は出來ぬ、今や四民一統で

階級差別をすべきではない全く國民皆兵として、わが全國の壯丁から精選すべき筈であるといふので、諸藩の士族は反對した。それから兵隊は、勿論帶刀をして戎器を持つのですが、現役兵以外には、何人にも帶刀を禁令したことも亦不平勃發の原因である。帶刀は鎌倉以來、わが祖先より傳來の家寶である。然るを全國四十萬の武士階級の者共が、その大刀小刀その外、家に傳ふる武器を残らず廢棄されることは、祖先に對する耻辱で帶刀を廢せられることは、武士の魂を奪取されるのであると、廢刀のことを非常に残念がり、それからわが戰國以來精練し來つた武藝を拋棄して、徒らに西洋の兵式をのみ信仰するのは宜しくない、又昨年から今年に渉る大戦争に於ける、軍士への賞典が正當でないといふこと、その外種々の不平を並べて、多くの歸休兵がその筋へ頻に苦訴したのであつたが、これ等の不平分子が聚つて、遂にこの暴舉に及んだものである。

明治三年正月二十六日、山口に於て、歸休せる脱隊兵が暴動を起した。彼等もまた兵制改革並に賞典等のことに平かならざることがあつて、遂に暴行に出でしものである。しかしその警報は即刻朝廷に申告はしたが、早くも天兵の來るを待たず、長藩内の兵力のみで鎮定した。

明治四年正月九日兇賊が忍び入つて、參議廣澤兵助をその邸に刺した。廣澤は維新の皇業を翼賛した功勞の第一人者として、木戸その他の人々と俱に廟堂重要な位地にあり、癸丑甲寅以來忠誠變ることなき、節義堅貞なる志士で、大村の死と同く天下の非常に惜む所であつた。

同三月二十八日は、長藩主毛利敬親が薨去した。防長の民衆深く徳恩に感じ、哀悼涕泣の狀實に考妣に喪する様であつた。その病篤きに當り、豫め起つべからざるを知つて、封事を草し朝廷に上つた。その薨ずるや、朝廷特に勅使を山口に遣はし、從一位を授け誅文を賜ひ、勅使はその墓前に詣して、幣帛を供へ宣文を讀んだ。敬禮厚しと謂ふべきである。又後年その勤王の大勳を褒せられて、更に正一位を追贈せられ、別格官幣社に祀られた。野田神社がそれである。また別に墓側に勅撰の神道碑を賜つた。而して防長人は猶ほ餘澤遺恩を景仰して、爰に銅像を造り、龜山の頂上に建設して、悠久に追慕頌敬することとなつて居る。

去る二年には、大英斷の建言に因つて、封土人民を天朝に奉還したが、四年七月十四日藩を廢して縣を置き、是より朝廷新政の樞機は着々整頓することとなつたので、防長の

内政も、漸次面目を改めて進む様になつた。

防長人は文久三年の夏より、明治二年の秋に至るまで、實に七年の間、戦争をやつたり、藩政を整へたり、頑敵に對しながら、藩地にありては、怠慢なく新事業を建設した。當時の俚諺に

櫻うゑたりいくさをしたりこれがほんまのやまとだま

といふのが流行したのも道理である。

防長人は屢々戦争をしたが、毫も利慾のためではない。日本國の平和盛運を目的とした已むを得ざる戦争ばかりで、決して自から好んで戦争したのではない。弊政多き幕府を廢し速に大御稜威尊き天皇御親政の復古を熱望した、その至誠の發露が、已むを得ずして戦争となつたもので、ツマリ古來長期の武家政治を轉換して、維新の大改革と爲り、版籍奉還廢藩置縣と云ふ段階に進み、わが勤王愛國の民衆、特に防長人は一層の精忠を抽て國事に努め、これより更に協力盡瘁、以て明治の大政を贊襄することゝなつた次第である。

防長人は前に申した如く、動亂時代に於て、攘夷戦を始め、京師の事變を起し、内訌戦をやり、更に四境戦争に及んだ。この前後引續く厄難の最中にも拘はらず、一方には優然力を新設事業に盡したことは、事新しく申置くべき好記念であるから此事に就いて今少しく絮説する。

當時防長が、のるかそるかといふ危急存亡の時機に於て、急設すべきは武器の用意であるから、防長國內に於て、銃砲火藥その他の製作に務め、猶ほ間に合はぬとて、長崎居留の西洋人に注文して、小銃汽船等を多數に買入れ、何時でも禦侮膺懲の策略に支問なきまで、準備が出来て居つのである。

又あの國事大混雜の中に、青少年學問の獎勵に盡力したことは、頗る感すべき業績で、明倫館の校舎を改築擴張して和漢洋の學問に、時代に應ずる新科目を設け、學力優秀の良教師を擢用したなど、頗る達見と申さねばならぬ。教育の事は獨り明倫館のみならずこの外諸方に開設してある、高等の郷校にも行き渉る様、學科の刷新を施したものである。

私ども少年ながら、當時の光景は親しく目撃して覺えて居るが、人生衛生の重大さを考へ、種痘療病等には、深く細心を用ゐたものでした。曩に萩に病院、また種痘所を置か

れたが、この頃山口の龍福寺に病院を設け、一般人のために種痘をも行ふた。その後暫たつと、山口の新道に大地域を劃して、好生堂の新築が出来た。總二階建の廣い建物で、患者の病室は二階で、外來、入院とも手當が善く届いてゐた。院長には内山成庵が居り、外に有名の醫者が澤山に勤めてゐたから、學校の醫學の方も、病院の治療の方も、それぞれ懸命に好成绩を舉げて、評判が宜しく何人も仕合はせをした。この外防長には良醫が多く、和漢の古方としても、奏效の美談が少からずあつた。藥店も長崎仕入の老舗があつたので、この戰亂中でも、醫療には大抵間に合つて居た。道場門前の宮竹の軒先には、巨大の藥袋を吊し、中市の木津屋の格子には、ウルユスの金看板が掲げてあつた。若し伊佐の賣藥も、昭和の今日まで、その營業を存続したならば、必富山の廣貫堂以上に繁昌して、内地ばかりでなく遠く外國にまでも賣弘めることになつたでせうに、廢業したのは如何にも残念な惜いことです。これは決して伊佐ばかりでない、防長の所々には昔の製藥があつて、慶應頃には名前の知られた名藥があつたが、今ではどうなつたか。昔は酒屋へ三里豆腐屋へ二里と云ふ山間の僻地では、醫者の來るまでと申して、家庭藥を十分に用意してあつたものです。

慶應時分は、幕府の權勢のためにわが四境を鎖され、長州征伐などと暴慢の宣傳をするので、外來の物資は缺乏したが、防長内に出来る物を獎勵節用して、それぞれ十分に間に合はせ頓と困ることはなかつた。

慶應頃の防長は如何にも、懸命であり眞劍であつた。學問にも武藝にも督勵が厳しかつた。私共少年ながら、嚴冬には寒稽古をやらせられ、水垢離を取つたものです。又夏の夜半には古寺の新墓地の卒塔婆や盆燈籠を取りに行き、又は山中の洞窟に狐狸の古巢を探るなど、肉體にも心膽にも、深刻なる鍛錬を行ふたものです。劍術、槍術、柔道、水泳、馬術、早道など、武道に必要な訓練には、油斷なく指導したものです。慶應の戰爭時代には、先輩者はなかなか骨を折つてくれたものでした。

慶應の諸戰爭には、いくつも感心すべき佳話があるが、中に特に忘れてならぬ美談を少しお話する。

その第一は藩内和平協心のこと、慶應元年二月十五日、いよいよ内訌戰が終了して、その月二十二日には、藩主が藩政關係の重要政務員を、悉く會同して、祖靈社を祀り、天地神明に祈誓をして、防長一統の和平協心を決議し、今後は、最早敵方も味方もない。

防長人は凡べて百萬一心、眞個に骨肉同胞であるべきことの誓約をした爲め、一同眞心復歸して、本統に内訌以前の昔に返へり、昨日の敵味方が互に怨恨を忘れて、俄に相方より結婚を申込むと云ふ様を痛快な慶事を残したことは、古今内外いづれの國にも又如何なる人類にも、實例のない立派な武士的行動で、實に永久に物語るべき無類の美談である。

その二は長藩の信用の事で、慶應二年の夏から秋に掛けて、防長四境の戦争があつたがそれは防長の内で合戦をするのでない、いづれの方面もそれぞれ國外即ち隣國の領土に出征して戦ふたのですしたが、到る所長州軍隊の仁義の行動に感した敵地の住民は、凡べて長州兵の來るを喜び、簞食壺漿して、歡迎するといふ有様で、此方の言ふことを何でも善く聞いて呉れた。譬へば長州兵が敵地に於て買物をするのに、一一金錢即ち硬貨を携帯して、重い錢勘定をしながら支拂をするのは、随分厄介であるから、談合の上で此方は長州藩札即ち此方の藩で使用されて居る紙幣で拂ふことが出來て非常に便利であつた。向うから云ふならば、長州兵は敵であるけれども、長州の藩札はそれは大坂で引換が出來きて、第一自分の藩の藩札よりは、長州の方が相場が宜しい、それに此度の戦

争は、固より武家の戦である、町人百姓が相方に別れて戦争に参加して居るのではないと云ふ觀念もあつた。長州の政治は昔から宜しきを得、たとひ戦争最中でも、他國の町人百姓との取引には故障がなく、長州の紙幣なら、受取つても決して損はないと申して何所でも藩内同様にどん／＼通用した。

慶應二年十二月二十五日、孝明天皇は寶算三十六にて崩御あらせられ、翌三年正月九日睦仁親王が御踐祚になりました。即ちこれが明治天皇で、それから明治元年八月二十七日御即位あらせられた。實算は十七に涉らせられたが、天資聰明の御方で、萬機親政あらせられ、是より維新改革の鴻業は、忠良の輔弼を得て、燦然奮進することゝなつた。大政維新の大號令が下だされてから、中央政府の用務は固より非常に多端であつたが、各藩政廳に於ける諸般の改革も、随つて繁忙を極めたものであつた。前に申した通り三月十四日、五事御誓文の宣布ありしは、大政の根軸として常に諧記すべき箇條題目として天下に敬誦された。

政治の進勢を順調ならしむるには、經濟機關の運行を障碍なく疏通せしめねばならぬが爰に熟慮を要したのは、通貨行使のことでした。曩に江戸幕府は通貨の策動に礙滯して

却て財政の運用上に支障を起した。それは徳川方の會計吏が、天下の金銀貨を幕府の膝元に集め、諸侯並に地方の富豪者流に、紙幣の發行を許したことが反つて、幕府の財政に意外の大失敗を招いた、遠からぬ段鑑である。現に明治新政府はそれやこれやを對比して、遂に紙幣のむしろ安全にして便利なることを議定し、明治元年四月五日の際に、太政官は太政官札即ち金札を發行することになつた。これは通用期限十三年とせられ、不換紙幣であつた。三岡八郎（後の由利公正）その他の盡力にて、その事は都合能く出来たが、其際廣澤や大村は長州藩の財政に深く知識を持てゐたから、紙幣發行の方法に就いて有益な意見を述べた。長藩は延寶年中財政經濟の智者をして、時難の窮乏を救済した經驗がある。これが爲めに防長の藩札は藩内は勿論、藩外までも厚き信用を得て、遠方までも自由に取引されたので、他藩人では鳥渡このまねは容易に出来まい。朝廷は世上の言論の取締を必要として、閏四月二十八日に、新著及び翻譯書類の、官許なきものは賣買を禁止する旨を公布された。

明治元年中に出来た社會事件も澤山にあるが、短時間では容易に話盡くすことはむづかしい。唯ひとつ一奇聞として記念して居るのは、福澤諭吉、森有禮、兒玉淳一郎の三人が中川嘉兵衛に勧めて東京芝の三田に牛肉店を開業させたことである。後ちに芝の露月町に引越して繁昌しましたがこれが、東京で最古の牛肉店であつた。

明治二年四月には地方諸官の事務を總掌するため民部省が置かれ、參與廣澤眞臣は副知事に兼任した。同九月民部省は太政官札の不便なる點を補ふため、民部省通商用として更に紙幣を發行し、これを民部省札と云ふた。この年三月山縣有朋は西郷從道御堀耕助と俱に、歐洲に派遣せられ、また野村素介、藤井勉三なども、歐洲を巡遊して防長への土産話を多く持ち歸つた。

明治三年三月には、高山幸助なる者が始めて人力車を造り非常に好評を博した。今日都會では餘り見掛けぬけれど、一時は大盛況で、その便利を賞せぬものはなかつた。この年閏十月二十日、新に工部省が設けられ、鑛山、製鐵、鐵道、電信その他の工業を掌ることゝなつた。この年政府は、太政官札、民部省札などが、製造法の餘りに粗劣にして偽造の現はれるのを患ひ、更に獨逸國の製造會社に命じて、偽造を防ぐため優良品を造ることゝした。同年また米國銀行紙幣、所謂グリーンバックの制を調査するため、伊藤博文は官命を以て米國に至り、その研究をして來た。

七月十四日に、廢藩置縣の令を發せられ、全國に涉り百般の改革を行ふた。同月二十七日には、新紙幣を以て藩札に交換すべき旨を公布し、その交換を了りたる舊紙幣は、凡べてこれを焼棄せることにした。

私の拙話も既に十回に至り、今回は明治四年の廢藩置縣を名残りにして、お別れする豫定でしたが、その餘燼として翌五年だけを加へて置かぬと、句切りが悪いから、以下は馬角蛇足として御聽取りあらば幸です。

明治五年一月八日に、東京日比谷練兵場に、觀兵式を行はれた。これが觀兵式の嚆矢であつた。二月二十六日には和田倉門の舊會津屋敷から發火して、附近丸の内の諸官衙、銀座、木挽町、築地、鐵砲洲に及び、海岸まで焼抜けた。その焼跡が後日銀座通りに新設された煉瓦市街の繁榮地となつた。

明治二年に大村兵部大輔の建言で設けられた九段の招魂社後ちの靖國神社も五年の二月五日に、社殿建築の上棟式が行はれた。東京府下に郵便を施行し、東京神戸間に電信機を設け、東京横濱間に鐵道を開通したのも、皆この年であつた。

明治五年には兵部省を廢して、陸軍、海軍二省を置かれた。また東京に書籍館を設け博

物館を開かれたのもこの年であり、東京日日新聞の第一號を創刊したのも同年なりと聞いて居る。

八月二日には文部省より學制を頒布し、十一月には太政官より國立銀行を設置すべく布告を發した。前年より横濱に於て經畫した瓦斯燈もこの年その一部を竣工して、點火するに至つた。

明治五年十一月九日に、大詔を以て改曆の御沙汰があつた。その文面に、太陰曆を廢して、太陽曆を行ふ、明治五年十二月三日を以て、六年一月一日と爲す、此日改曆式を行ひ、太神宮及び歷代皇靈に告ぐ、尋て太陽曆を頒布し、假りに祝日祭日を定め又晝夜十二時を改めて、二十四時とすと見えた。

改曆の話に及んで感想無量であるから、茲に少々愚存を陳べなくてはならぬ。曆は本來人間に寸時もなくなくてはならぬ無比の必要物である。創世の原始時代から自然と天文氣象を觀測して、天賦の知覺に應じ、毎日毎月毎年を経験した知識を以て、簡單にも各民族が、それぞれ相當の曆法を定めて居つたものです。日月星辰や、風雲雨雪を仰觀したり山野草木の開花落葉を賞看したり、春夏秋冬の氣候寒暖の變移に遭逢したりして、同じ

ことを幾回も繰返す内に、その耳目や皮膚に感じた體驗を組立てたのが、實際の曆となつたものでせう。

日月の出沒で、晝夜の區別と長短が分かる、日數を計算すれば、梅や櫻の花が何日目に再び咲いたか、紅葉の色を染めるのも、梨柿の熟するのも、前の時から指を折つて勘定して見ると、丁度一周年に回つて来る。斯る實驗が積り積もつて曆となつたので、靜に沈黙せる山川草木も悉く人類のために天然の理法を雄辯に物語つて、天地自然はわれ等に必要なる知識を授けて呉れる恩師である。

天文氣象の自然顯證に基いて、算術曆法は原始時代に研究せられ、長き時代を経て高尚に進歩し、後に天體星座異様の觀測が出来て、太陽曆や太陰曆の變つた建方も生じたが世界の諸民族が、上古より曆を傳へて居つたことは、興味ある好題材と思はれる。

古き昔に於て、エジプト、ペルシャ、ローマ、また歐洲諸國には太陽曆が用ゐられ、バビロニア、ユダヤ、マホメツト敎國、ギリシャ、印度、支那などは太陰曆が行はれたることである。

曆は人間の座右に一日も缺くべからざる必要の什書である。凡そ天地の間に生命あるも

のは、おのづから曆を知つてゐる。山川、草木、禽獸、魚貝すべて然り、況や人間に於てをやで、曆は人生行程のメートルである。世上萬般の用務は、何事も曆の計數に頼りて遂行されるのである。

いづれの民族もいづれの時代にも、能く曆は承知してゐた。日本には古くより日本の曆があり、ずつと古き時のものは分らぬが、中世の昔よりは、支那の曆が傳來したものである。その支那曆でも一番最初に傳來したのははつきりと分らぬが、今日の記録では推古天皇の時としてある。

推古天皇の時に、元嘉曆が用ゐられ、持統天皇の時に、儀鳳曆が用ゐられた。淳仁天皇の時に大衍曆を、文徳天皇の時に五紀曆を、清和天皇の時に宣明曆を用ゐられた。その後算學も曆學も造詣が深くなつて、近く江戸時代に於て曆法を改定せられ、貞享曆、寶曆曆、寛政曆、天保曆が制定せられた。以上はみな太陰曆であつたが、明治五年の十一月太陽曆を採用せらるゝことになつた。依て明治五年十二月三日を以て、明治六年一月一日と爲し、爾後曆法に改變なく今日に及んでゐる。只一年の日數は、決して三百六十五に正除される譯でなく、必些少の剩餘を残すから、陽曆にも陰曆にも、閏月を置てあ

る譯である。

然るにこれ等曆制に必釐毛の差違あるを考へず、近時學者の斷定で、新舊曆即ち陰陽曆を換算する風がある。これは史上の事實に、惑を生じ、往々重要事に於て、後世の謬りを招く虞があるから、この兩曆換算は、斷じて已めてもらひたい。

その一例を申すならば、孝明天皇の慶應二年十二月二十五日崩御を、一月三十日崩御としてある。このため一月を次年に繰下げ、慶應三年一月三十日のことと學者の著書に記されたるのは、言語道斷の曲事である。又明治天皇嘉永五年九月二十二日の御降誕を、十一月三日と書き、今ではこの方を却て、正當の日と書く人が多いが、實にこまつたこととす。そうなると明治天皇が、御踐祚になつたのは、慶應三年正月九日であるから、若し孝明天皇崩御の一月三十日を信ずるならば、明治天皇の御踐祚が、崩御の遙に前のことになり、不都合極まる次第である。この新舊曆換算のことは、先日一度述べたやうですが、餘りに不都合であるから、念の爲めに重ねて大略を申述べた次第である。それから紀元と申すことですが、神武天皇即位紀元、また耶蘇降世紀元と書いて、紀元前何年、紀元後何年とある。紀元後の方は宜しいが、紀元前何年とあるは、何の計算に依る

のか餘りに粗漫である。紀元前二千年三千年と申しても、何を基準にしたのか、その據るところを聞きたい。

防長文化の浸潤は、古今上下なかなか、複雑なことが少くない、全體の物語は容易に盡くされぬから、詳細は他日の機會を待つこととして、今日は産業工藝の内、陶工と製紙のことを少しく申添へる。

防長二州の産業の中で、陶工は沿革が古い。周防には神功皇后征韓頃の古製があり、長門には天平延喜頃の殘窯が認められる。萩には松本中の倉、小畑、沼田ヶ原、東光寺、志都岐山の陶窯があり、深川の三の瀬焼、また豊浦郡の鷹羽山焼、小月焼、田耕焼があり、厚狹郡には須惠焼があつた。周防では山口の宮野焼、佐波郡には佐野焼、桑山焼、西の浦焼、末田焼などがあり、都濃郡には戸田焼、玖珂郡には多田焼、松坪焼があつた。此等の内幾つが今日まで營業を存續して居るか又どれが廢業したか。残念ながら殘存してゐるものは實に稀である。

長い歴史を有する防長の陶工の事は、徒らに過去の沿革を好事者流に話すのではない。今後の改良進歩を希望する爲めである。何卒今から更に昔の産業を奮勉繼續して、十分

の研究を勵み、一生懸命に往昔の名工に負けぬ様に、廣く他府縣の名工に就き深く精進したら、古人を凌駕する程の良工が現はれるであろう。近來他方に於て新に陶窯の繁昌して營業上成功せるのが少くないから、愛知縣や岐阜縣や佐賀縣や京都府などの、好模範に倣ひ工夫を凝らせば、必大に發達すべき好望がある。果して此の期待か協ふ曉には防長の年産益は、幾百萬圓に登るか知れないが、この好産業をこのまゝに放棄しあるのは寶曆の昔を思ふて浩歎長息に耐へない次第です。

維新前後に於ける防長の治國政策は、何と申しても繁忙の極であつた。戦争に出掛ける少年教育にも大勉強をさせたが、農作工業商事にも非常に努力した。而して農村や商家には廣汎に獎勵の効果が現はれたが、工業方面には種々雜業が多いから、二州を縦貫する小瀬川から彦島に至るまでは、種々珍らしい職業が澤山にあつたので、評判の宜しい名産が少くなかつた。これは古い名物帳に記されてあるが、その種類も多く、その製品には優良の細工が顯はれて居る。

農業、漁業、林業、鑛業などが、主として産業經濟の大立物であつたが、製鹽、製蠟その他の産物は固より撫育局の倉庫に入り、これを取纏めて大坂藏屋敷の方に廻し、一順して藏元の會計官の手に集まつて、有利に精算されたもので、物産中の、最重要視しされたものの一つは製紙です。昔も廣く用ゐられ種々の用途に役立つたが、今では次第に用向が多くなり、舊來の様に紙本能の文房用でなく、諸種の代用品として用ゐらるゝことゝなつた。昔の撫育局時代の紙は、強き纖維原料で漉上げたものであるから、非常に勁堅で、引牽力強く、その方面の手工には、重寶に使用され、公租官税に納むることを許されて、その成績頗る宜しく、大に撫育局の金庫を喜ばせた。

防長製紙の業は、多く山間僻陬の耕地に乏しく農作に使なき寒村、申さば窮厄多き山地若しくは不毛の荒蕪地にして、何事も不自由勝な間地の細民を救助する目的を以て行はれ、長藩政府はこれに低利資金を前貸として貸し與へ、その便を計つたものであるが、その返済方法は、製紙の現品を以て済崩しにした。その原料は主として楮と三楮であるが、時には麻、雁皮、その外纖維強き原料を求めて、鈔造したもので、今日製紙家また植物學者の説に依ると、純日本紙の好原料と爲すべきものは猶ほ數十種を栽培し得らるゝと云ふことである。

昔は防長が純日本紙の名産地として、殆ど製紙の代名詞となつてゐたが、今では世上一

般に西洋紙を多く使ふことになつたから、洋紙の力が和紙を壓倒することゝなつた。昔の通り和紙を手漉にするのと、機械の力で洋紙を製するとは、製造費が大違ひであるから、従つて製紙の直段が逆も競べものにはならぬ。そこで和紙か衰へて洋紙が幅を利かせることになつた。

古昔防長人が、紙を上手に漉いたことは、近國からの傳習もあつたでせうが、その初は朝鮮半島から傳來したものでせう。朝鮮はまた支那の製法を改良して日本に傳へ、日本更に日本式の良種を作ることになつた。支那では漢の安帝の時に蔡倫と云ふ人が始めて紙を作つたと傳へられてゐるが、わが國の景行天皇や日本武尊の頃に當る。日本の製紙は餘程古いことゝ思ふが、明瞭には分からぬ。とにかく推古天皇の時に、高麗王からわが國に遣はした。僧曇徴は多藝多能の天才で、法隆寺の壁畫で名高いが、實に紙や墨を作り、彩色を施すことが上手で、彼の作つた紙は、今でも正倉院、東大寺、法隆寺その他の名刹に保存されてある。正倉院の御物は天皇御座右の遺品で、天平年度の物が多いが、中にも勅用の御料紙は、白麻紙である、支那の古書を觀ると、唐では麻紙を用ゐて詔勅を寫し、『相を拜するときは白麻を用ゆ、餘は黄麻を用ゆ』とある。天平以來の寫經

用紙や、官府書類が黄紙であり、後世長州藩の政府、その外の重要向の用紙が、専ら黄紙であつたのは、黄蘗の液汁を防蟲藥として漉込んだものである。後ちには代用に山梔（くちなし）の汁を煮て染めた。その後世上に種々な色を付け、五色染にして、色紙と云ふて賞用することになつたが、餘り脱線して最初の防蟲の目的は忘れられたのである。奈良地方は帝都であつた爲めに、工藝技術の進歩は顯著であつたが、防長もまた生産業の主旨に基き、製紙には古人が絶大の努力を盡して居る。わが國の製紙の原料は、時代と地方とで、定則の物もあり、また中には珍奇のものを見付けて、名所名産として、新面目を誇るのもあつた。法隆寺の百萬塔の陀羅尼經や正倉院の五色紙、吹繪紙などは、殊に奇異の感を深くせしめるのである。支那の紙は原料を腐敗させて遣うから、紙質が脆弱である。わが國では、外國の製法を改善し、楮、麻、樹皮、桑、蔓、葛、繭、嫩竹、麥麩、稻稈、凡べて強き纖維ある草木の皮膚を原料とし、木連灰を入れて煮詰め、黄蜀葵の根より粘液を取り、之を和して漉く様に工夫したので、支那朝鮮の物よりも、出藍の良紙を作ることになつた。わが山口の正平頃の古紙を見ると、昔の鎌倉の寫經紙また京都紙屋川の紙屋院の古紙を思合はせるものがある。大内氏の永正頃の刷版紙、また毛

利氏の藩政時代の藏版局刷版用紙など、いづれも純粹の良紙を精撰したものです。大政維新、明治の初になると、出版印刷が面目を改め、木版の手摺を已めて、西洋式の器械印刷となり、西洋紙を用ゆることになった。その用紙は、最初は西洋から来たが、日本でも追々工藝上の技術に巧者な人が出て、西洋式の製紙會社が出来て、今では立派な紙が外國に向けて、輸出されることになった。

日本に於ける製紙業が發達したため、今ではわが固有の和紙を機械で漉くことになった併し純日本式でなく、西洋流のパルプ原料に倣うて漉くから、容貌は和紙ですが、内質は西洋流の頗る軟弱なもので、堅にも横にも斜にも不規則に裂ける、若し本統の和紙ならば眞直に堅に裂ける筈である。これは日本性の長き纖維の原料にして造ればよいのに折角の結構な好原料をパルプ式に粉末原料として漉くから、引牽力が無くなる。矢張元の簣漉に改め、原料改造に工夫を廻らしたら、堅硬なる良質の和紙が出来るに相違ない私は五十年來、この改良案を考へて居るが、機械のことに素人であるから、何人も我説に耳を傾ける者がない。往年今立吐醉と語り、同人の工夫發明で、理想的木製器械を作り、平井仲吉の助を得て、面白く長尺の紙を漉出し、幸に專賣特許まで得たが、惜いこ

とには、その後、今立も平井も病歿したので、爾來このことを語るべき人が何處にも居ない。

古い昔に先輩島田蕃根の紹介で、富士製紙會社に行き、河瀬秀治に逢ひ、和紙改造のことを長談し、印刷局の抄紙部でも、王子製紙會社でも愚存を述べたが、聽いて呉れる人はなかつた、それから下の關の土井重吉が吉田川の岸縁に製紙工場を建設したと聞いたから、折角榑谷晋三を介して訪問し、防長の製紙、特にかねて持論の純和紙機械漉のことを、篤く勧める筈でしたのに、間もなく土井も榑谷も病歿した。

私共は郷土を敬愛する至誠よりして、文化眞隨の大精神を復興せしめ、この日本を防長たらしめ、この防長を日本たらしむる様にと、及ばずながら渾心の氣力を傾倒して居ります。わが防長は本土の西陲に居り、お互の古き祖先は、此地を搖籃とした大陸文化の東漸に努力したのであるから、何卒大昔から繼承した絢爛的文化の系脈を失はせたくないものである。

日本また防長の古代文化は、今日更に研究を待つべきものが多くある。西方に反溯すれば朝鮮、滿洲、蒙古、支那の經路に於て大なる足跡の殘されたのを見るであらう。その

微細な證據を求むるならば、土中より發掘される出土の陶器や、彫刻などに、珍らしい物が出て來るであろう。支那の文化も、溯入して見ると、印度文化の古きものがある。燉煌や大同その外彫像壁畫の如きは必印度ばかりのお土産ではあるまい。

印度文化が、諸方を経て日本に這入たことは確であるが、古い印度と後ちの印度と、また北南中部と、所に依つて非常に違ふ。アヂヤンターの名作品は、果して全部が印度式であるか、若し他方の物が混和されて居るとしたら、遠方からの珍らしい作品が見られることせう、印度へは、千年以前にもまた近世にも、探檢に行つた人々がある、その見聞する所は、古今如何なる相違があるか。昔から盛に外國に行つたのは、佛敎の僧侶である。常に三國傳來といふから朝鮮支那印度のものを傳へて來た譯であるが、その根源とする印度の習俗は、長い歲月の間には、隣國の交通よりして他種族のものがいつか入込んだのがある。即ち波斯、西藏、アフガニスタン、トルキスタン、アラビア、エヂプト、マホメツト敎國、希臘、羅馬の諸國から、時代を追うて染入したに違ひない。これが十分消化して來たか、又來ても不消化のまま存留して居るか、その問題は兎に角として、支那や印度の文化は、亞細亞中部の重要な知識を扶植したものであるが、而もこれ

に歐羅巴と亞比利加の文化を加へて、都合能く混同したので、自然印度は印度、支那は支那と、それぞれ昔からの風習古俗に應じて、今日に至つたものでせう。

神武天皇御東征以前の防長は、朝鮮を経由した大陸文化が旺盛であつたが、やがて御東征後は南洋よりわが九州を経て、北進するものが勢力を得ることになつた、豊後水道より瀬戸内海に流れ入る潮勢に乗じて、北上する文化の勢力は、また殊に見るべきものがあつた。

古來防長人が、早く亞細亞大陸の文化を攝收したのは、主として支那方面からであつたが、後世歐洲や米國の文化を自由に取入れることになつたのは、すべて南方からの北進文化であつた。東漸文化、北進文化と云ふも皆その時代に應じて考察すべき要點である。今や日本は勇敢精銳なる澤山の兵隊を支那に送り、あの廣い領域に於て、長い間戰爭をして居る。これは何の爲ですか。偏に聖天子の叡慮を畏み、東亞の振興を目的とし延いては世界の平和を克復したいからである。決してわが領土を増殖したいとの、侵略策ではない。實に平和道徳の眞願から來た、民族救濟の麗はしき良精神の啓發したものである。これは恰も外科醫者が重傷の患者に切斷治術を行ふと同じである。その患部を切斷

して患者を苦めるのは固より本意でないが、これは洵に已むを得ん。この苦痛の施術でなければ病人が助からない。この苦痛の治療で、やつと病氣が直るのである。戦争も同じことです、本統の平和は戦争の大施術をせぬと、平和が本復しない。防長人が前述の通りに幾度か領内の人命財産を犠牲にして、義勇奉公の奮戦を續けたのも、同様の本旨である。みな日本のために勤王報國と云ふ金看板を掲げて、何處までも、天地神明に誓ひながら、みなみな戦場に臨んでゐる。

今の日本人は、昔の防長人が生れ代つて國家のために、あの忠勇なる戦争をし居るのである。防長人は楠氏の誓訓に倣ひ、七たび人間に生れて、戦時にも平時にも、働かねばならぬ。今の防長人は昔の防長人たりしことを忘れてはならぬが、今後の防長人は殊更先輩の模範的の善行偉績を佩服して、永久に義勇報公の大精神を忘れてはならぬ。

私は防長人であり、防長人は日本人である、故に私は日本人である。此所に今夕お集りの皆さんは、いづれも防長の有志で、平素深交を辱くして居りますから、凡べて御同感のことゝ存じます。お互に防長の心を以て日本に盡し日本の心を以て防長を助けられるならば、和平協力して百萬一心一億一心となること疑なし。しかし凡べて實踐躬行とな

ると、決して簡單には參らない。

古來先賢名家の遺こされた著作は、山林草木の如く澤山にあるが、結構と申して敬服すべきものばかりではない。中には高名な學者の傑作と宣傳された著書の中に、随分感心致しかねる條項が少くない。孟子は『盡く書を信ずれば書なきに若かず、吾武成に於て二三策を取るのみ』と曰ひ本居宣長は『ふみよめばおほやけばらもたゝれけりひとりわらひもまたせられけり』と詠じて居るが。昨年初夏以來開催せられた本會も既に十回に及び、杜子美の詩句にある『君と一夕話すれば十年の書を読むに勝る』の意義に因つて發起された、郷土防長を懷ふ文化史の拙話もこれを以て終演と致します。

御勧めに従ひ拙話を試みましたが、元來鈍才淺學の老書生ですから、餘り御役にも立つまいが、墨子は甘瓜苦蒂物無全美と申して居る。如何に甘い瓜でも、蒂となれば、必苦がい。故に甘い瓜を食ふて、そのにがい蒂の所は捨てるがよいと申して、誠めて居ります。柿でも梨でも、へたの所は役に立たぬ。孟子も本居もこれには首肯するであらう。まして私の話は甘い身よりも捨てられる核や蒂や皮の方が多いのですから、何とも御迷惑であつたらうと恐縮して居ります。

この拙話も、わが防長の青少年諸子が傳聞せられて、幾分にも御用に立たば、望外の幸と存じます。曾て一友人に

用ありやわさびおろしも秋まつり

の拙句を贈つたことがあります。いさゝか芹誠の一片を御諒察あらんことを祈ります。さて昔より人世は夢の如しと云ふが、回顧すれば如何にも歎息すべきことが多い、私は安政四年に生れ今年は八十四になります。幼少の頃より讀書先生の門に入り、多年漢學國學の稽古を受けました。また明治三年から十三年頃まで、十餘年間は、山口、萩、東京、横濱で、獨逸語と、英語の稽古を致しました。その後長病のために一時學問を廢し内外の書籍を悉く高閣に束ね、六十幾年來、全く無學問人となり、學問には遠く離れてゐたため、何の役にも立たぬ様になつた。國語、漢文も若い頃の様には出來ず、洋學も一通の學科書籍を讀む位は驥尾に附いて差支なく、また獨逸人と英米人の間に往來して會話、作文を交換することは別に骨の折れることゝは思はなかつたが、さて今日になると、眞に盲人が籬根を覗き、聾者が音樂を聽かんとする如きもので、西洋書を讀むことも出來ず、西洋人と話を交へることもならず、片輪者になつた。これは全く鈍才淺學の

然らしむる所と、慙愧自覺して居ます。

しかしこの衰病の老書生も、今後猶ほ養生に勉め、邯鄲の歩を學ばず、西施の顰に倣はぬ様に、用心して困勉したならば、この度の拙話を訂正補修することが出来るかと存じます。諸君子は前途遼遠、頗る春秋に富まれるから、何卒百歳の健壽を全保せられんことを祈る。爰に往作一首を附記して祭正を冀ふ。

今日諸豪齡近百。休言七十古來稀。壽康吾亦非無術。欲養殘軀試奮飛。

私は明日にも葬式を行ふか、或は誤つて尙ほ十五年生きびるか分りませぬが、いつかまたゆつくり御目に掛り、屢々痛飲快談を重ぬの好時機をお待ち致して居ます。

看雨居士三吟稿

會通部十三卷

今日諸事歇工百休之七十古
車務壽康安亦非等湖湖營
涉能試奮飛

昭和辛巳三月廿日
二十五日看日記
謹啓

いしはらりちんかしてあふは
ゆきまらあふしりちんか
華巳の春のしんりちんか

いづくの社此傳へたす~~あ~~てそつていふ
みふと川むらの山屋いふにむねはあ
のほらあふと 4分川のほらにそつたふ 君の源其信の十五

用ありやと出いおる
秋まは李
君雨の十五



看雨閣詩稿

偶成

文章遊戲不須工。病骨相仍幻影中。一片春愁天欲夕。
桃花林外雨濛濛。

歸廬題壁

鳥啼花落暗銷魂。風物依然夢尙存。不許衡門車馬入。
林園深處是桃源。

大谷吉隆墓下作

泣弔無雙英傑墓。風悲花落雨滂沱。荆榛蔽道無人到。
唯有幽禽唱挽歌。

雜

詩

行行三四里。平野草芊芊。花落黃昏夕。
長吟憶古賢。

遣

懷

福祿迴旋命承天。壽康本是要安全。貧餘舊態君休笑。
此一狐裘三十年。

有客訪吾掃葉山堂置酒論交賦小詩而似之

今日諸豪齡近百。休言七十古來稀。壽康吾亦非無術。
欲養殘軀試奮飛。

春日偶作

滿城晴日翠楊垂。春到鶯花有好詩。一片生涯淡如水。
風風雨雨樂天時。

郊外閑居

家住清溪深樹林。索居年久與心馴。酒廡魚肆三餘里。
此處鶻聲自在聞。

寄友人

金玉築臺欺化工。千堆寶器壓名公。重財臨死難擔去。
不若早賑知已窮。

雜感十首之一

塵事如霜葉。紛紛奈老何。江城秋晚處。
風雨不堪多。

讀史有感

一代興亡在厥初。不論世運儘乘除。經綸考法千秋上。
玉帛通交萬里餘。義透人心豪傑筆。毒壅君眼姦臣書。

先生自命山梁雉。飲啄清流意淡如。

春日偶成

花落春風老。柳條掃我衣。吟行碧山下。
日暮野雉飛。

海樓望月

水南雨霽碧雲殘。白玉當樓大似盤。今夜十分明月影。
頻年多在異鄉看。星連天闕鴻聲苦。潮落海門魚氣寒。
拊髀歡呼斯夕好。詩愁又已上眉端。

春日雜詠

桃花落盡梨花開。春色幾番忙裏催。人世更無寧靜日。
清明節過雨風來。

同

花開花落託春風。知死知生利害空。世事紛然喫茶去。
靜觀明月只圓通。

北海所見

層瀾十丈不看山。寒矣天風破酒顏。指點長鯨大於屋。
來從隸羯滿洲間。

探梅四言

溪上將暮。扶節問花。暗香脉脉。疎影斜斜。
淺漲蘸月。濃烟罩家。詩人悄立。冷淡生涯。

客居題壁

客路營營未得閒。竄過擾擾利名間。半肩行李一瓢酒。
不奈征途險似山。

贈人

村驛重逢又幾年。長江春盡水如煙。青山花落瀟瀟雨。一路晚風聞杜鵑。

同

水風吹月影如煙。夜白蘆花十里天。偷檢衣裳尋舊感。酒痕猶記五年前。

同

轟雷帥雨驅炎熱。頃刻天晴夕日銜。返照涵江暮山紫。野涼初上白蕉衫。

秋夜閒吟

月滿秋庭夜欲闌。空間露氣撲人寒。桂花香動清如水。得此天然七返丹。

客中雜詩

篋輿載夢度秋山。林上星殘一二三。感慨蕭蕭倦歸客。菊黃蟹紫憶江南。

次友人詩韻却寄

梨花風起雪漫漫。盡日擁爐春怕寒。一笑吟情無寄處。青山偶向靜中看。

同掃葉山房主人賦

貧極頻稱隣舍富。老來空算死兒年。誰知世運何邊定。禍福乘除命在天。

同

誰駕飛機驚鳥群。長空萬里衆星紛。莫言天狗能翹翼。鷄犬今皆去入雲。

醉餘書紳

血液循環身是健。忘憂寡慾養精神。長生有藥如何物。吾服肝油四十年。

題書齋壁上

讀天下好書。交絕世快人。養生壽康足。豁然樂老身。

與客語舊醉後有作

澆季民情愛貨色。逐年時好偏爭新。麒麟閣上名工手。不畫英雄畫美人。

題高杉東行先生傳後

回天勳業壓群雄。快戰濟難易反掌。願聚人豪淨貨來。為君鑄作黃金像。

失題

世人成業豈容易。非得長生成業難。養壽何不若禽獸。龜歟萬載鶴千年。

同

人生知字是憂根。不若吹竽入齊門。畢竟世間多顛倒。狐乘馬又鶴乘軒。

同

欲閱天下無限書。難于精衛填蒼海。人生三萬六千日。筆敗舌爛唯有悔。

同

吟鞍衝雪訪仙家。月照黃昏詩興賒。一脈暗香搖掠鼻。始知溪上有梅花。

雨水節過春始融。一簾新暖入東風。野梅遶屋花開落。夢在影疎香暗中。

同

一年三百六十日。眠食營營寄此生。唯喜素心猶未滅。講書磨墨贊昇平。

同

美婦色衰悲薄命。英雄謀敗入空山。人生定運乘除在。畢竟賢愚隔一閭。

同

半生苦學太艱難。欲把短毫回倒瀾。夜半夢醒莫人問。秋風撲雨一燈寒。

同

吟行又爲求佳句。探討梅花江上村。歸路黃昏益大月。依依送我到柴門。

似諸友

鳩徒開讀講。儘喫三十棒。論學遂歸空。

漁夫失鷓蚌。

雜詩

江上青山翠欲流。詩人倚遍夕陽樓。桃花落盡春風老。野水溶溶魚上舟。

同

爲逃炎境養精神。湖上浮船耽漁釣。又恐驕陽欲燎天。催人禱雨龍王廟。

同

飄然萬里事優游。筆劍匆匆掃旅愁。如此江山佳麗地。埋吾病骨太風流。

同

索居臥病歎離群。木落雁歸寒夕曛。夢破間來求句處。一簾疎雨便思君。

謁嚴島神社

鼇背戴蓬萊。巖頭高閣開。驚濤縹緲處。

富嶽剝雲來。

水月圖

風過急瀨水聲清。水接涼天月色明。獨坐靜觀水與月。天心水面宿雲平。

過琵琶湖

湖山雪霽黃昏夕。微醉詩成呼快哉。一世風流與誰語。扁舟載月訪寒梅。

到西長尾浴鑛泉

山下樓臺綠樹回。清泉一道洗塵埃。涼牀睡覺天將夕。閣閣蛙聲喚雨來。

荒蘭岬

海驛斜陽射醉顏。林端成隊倦鴉還。回頭淡黛橫天末。知是房南總北山。

秋日旅行

西風秋老萬重山。行盡白雲紅樹間。驛酒覺來馬頭冷。夕陽疎雨度函關。

丙辰歲旦

東西一萬里。上下五千年。
國威隆且全。帝土加廣大。

簡人

倚樓看雨快心時。一醉陶然夢入詩。
百年知己果推誰。天下英雄皆老矣。

高杉東行五十年祭典恭賦

四境麾軍破驕敵。當年勳績屬君多。
兒女今猶唱凱歌。山河依舊青無恙。

清遊會席上似諸友

風露秋深發野花。橐駝園下且停車。
詩夢乘涼落酒家。黃昏待月聞蟲語。

中谷正亮墓下有作

勤王忠績足千秋。後五十年志始酬。
好降靈魂藻蘩羞。感泣天恩及枯骨。

寄三浦觀樹翁

英雄徒守利名勤。豪傑多忘道德勳。
百年知己獨逢君。世事紛紛共誰語。

自信州至北越道中所見

曙霞籠遠樹。殘雪擁群山。
車飛活畫間。滿目皆詩景。

贈曾田文甫

今古英雄遊息蹤。羨君與客好追從。
夢破南禪寺裏鐘。鴨涯一醉春如海。

訪大田幽石席上次韻

酒詩何必說窮通。世上炎涼反掌中。眠覺山亭蟬莫語。
一簾過雨夕陽紅。

寄松村介石

欣君篤學酬天下。笑我迂才似朽樗。邂逅話來人世事。
果然勝讀十年書。

春感

滿城風雨已殘春。狼藉櫻花委作塵。堪歎世間多薄命。
英雄末路似佳人。

寄國重半山

月出東山暮色移。涼棚賒醉柳堤湄。想君酣興對知己。
唱盡峯翁白雪辭。

縱吟

人物十年老。風塵萬里同。山河凝蜃氣。
天地落壺中。

同題

岸上垂楊綠。擁舟馴鷺降。黑雲浮遠嶺。
白雨度長江。

寄友人在異鄉

胸中淡淡無何物。一片託生天地間。八十五年春已老。
雨過花落靜看山。

東笠原百里

詩囊膨脹壯君行。百里江山半日程。西出函關忽大笑。
芙蓉天外惹吟情。

雜

詠

渡畔野梅遮蟹家。扁舟載酒買魚蝦。白糝糊處黃昏月。唯見濃烟不見花。

奉寄家大人

窮學青衫得瓦全。文章未直一文錢。門松園菊無恙否。不到家山已八年。

房南途上

異鄉風雨客魂銷。粉壁高樓趁海潮。第二橋頭更回首。酒帘多處柳條條。

川尻途上有作

鵬也不飛天萬里。放吟傾酒氣豪哉。疾風吹髮雲將雨。大浪如山捲海來。

春日偶成

頑陰暗澹怕黃昏。山色依依碧染門。鶉鴝呼來一犁雨。夢迷江上杏花村。

春夜小作

情淺香烟細。銀餅試綠茶。夜來江上笛。吹月度梅花。

題墨梅

二月江南雪始融。一簾輕暖送東風。黃昏月到孤山宅。春在影疎香暗中。

病懷

俗緣全謝有清緣。病骨詩愁伴老禪。燈滅五更紙窓白。遠鐘和月撼殘眠。

寄懷山田空齋君

柳塘雨足綠參差。暖入東風夢亦遲。昨夜孤山梅一樹。花香早已向人披。

西原村途上

行賞家家郭橐園。丹楓黃菊動吟魂。晚風一道殘烟白。秋冷山陰落木村。

秋晚湖上雜詠

短夢輕塵瞥若煙。京城淪落又三年。重上紅樓多涕淚。月照離人暮夜天。

江村晚眺

殘陽醮遠波。歸艇看漁老。人去影依稀。暮江煙一道。

無題

名區屬零落。春雨濕花寒。前代珍藏物。人爲骨董看。

郊外雜詠

斜日蓼花紅一川。斷橋蕭寺野塘前。小春時節郊南路。訪菊尋楓入暖煙。

秋夜十絕之一

綃幙秋風上髮根。莎雞聲繞敗籬門。才人一例傷心病。帶醉紅箋寫淚痕。

瑞松庵

松濤不起寺門閒。詩酒二分泉石間。塵外風流向誰話。春寒十里夕陽山。

偶 成

酌來君美酒。洗盡我胸塵。宇宙茫茫裏。知音真幾人。

家山歸夢圖

故山煙景夢悠悠。歸路分明眼底收。官柳野梅依舊好。扁舟載月遡春流。

丁未元朝似人

戰捷餘威充天地。至尊新啓太平春。野梅暄靄皆生氣。我亦揚揚日本人。

丙午歲旦

開銅笑見髻邊烟。自古英雄本健全。大器晚成吾所願。蓋棺餘得五十年。

丙午某日大雪

滿城風雪一望寒。行路人爲畫裏看。野梅脩竹山陰夕。白玲瓏又碧琅玕。

過湖上有作

湖上白帆鷗背山。水明樹翠總成灣。漁郎罷釣吹長簃。夢落烟波夕陽間。

春山行旅圖

載輿入山驛。鳥語夢中聽。霞隔梅花白。湖涵竹影青。斷虹開暮色。過雨帶魚腥。遊賞春方好。酒詩長短亭。

古曆中秋

銀漢影低涼味濃。草堂安臥養疎慵。蟲啾啾處娟娟月。

露氣吹秋上古松。

題如夢帖

浮生淡於夢。萬事總成空。莊說自然夢。
 佛談本來空。榮枯或應夢。毀譽又是空。
 高笑仰天坐。身在大夢中。

秋夜

月上湘簾露滿庭。水風吹淺送簷鈴。蘆花雪亂鷗聲白。
 荷葉雨消燈影青。狼藉相思付遊子。蕭疎獨語向空亭。
 秋天一夜情千里。悄立湖邊酒又醒。

森戶

怒潮嚙岸灑征袍。海南風光氣自豪。忽見笑顏誰招我。
 芙蓉天半剝雲高。

長門黑川途上

追懷當年羽賀臺。勤王義士練兵來。春風三月黑川路。
 得得吟行見野梅。

書感

江湖夜雨夢魂驚。一穗青燈了半生。回首滄桑感更甚。
 且磨淡墨寫幽情。

間中雜詠

僻境無人問懶夢。酒醒燈地夜三更。蕭蕭撼枕爲何物。
 落葉隨風送雨聲。

同

斜日森茫春一陵。繫舟江岸卸漁罾。東風吹雨桃花落。
 寸大香魚始上罾。

同

吟對春風笑靦然。夕陽多處足高眠。山堂夢覺茶初熟。
一樹梅花伴老禪。

友人携酒而來賦贈

世間得喪似看棋。問馬稱猫彼一時。雨夜靜尋心底事。
總被白髮青燈知。

高松客中

垂楊送客繫輕舟。花落斜陽對白鷗。萬疊青山一杯酒。
春潮和雨灑離愁。

聽秋草廬吟詠

題 知 ら ず

山さくら軒端につゝくわか庵は

花よりあけて花にくれけり

青山も赤阪もまた櫻田も

霞の關も花つゝきなり

かたしぐれふりのこしたるはじめみぢ

夕日ヶ岡にけふも來て見む

をしまるゝたからもたねばぬす人の

來ぬこそ夜の夢もやすけれ

○ むらさめのはれゆく空の雲間より

○ 夕日にかすむふじの遠山

○ のりものゝをほきなかにもあやうきは

○ 人のしり馬またくち車

○ うれしくも軒の葎のかれはてゝ

○ くまなくはれし冬の夜の月

○ 清見瀉しくれもはれて波こしに

○ 夕日にかすむ沖の島々

○ さよふけて月と越え來しほととぎす

○ とゝめかねけんすまの關守

○ 蛙なき柳ぞけふる池の邊に

○ 春ものどかにそよく藤なみ

○ なるみかたしぐれに袖をしぼりつゝ

○ 笠寺さしてわれやいそかむ

○ 待つ身こそよとの川瀬の水くるま

○ いくひめくりて君にあふべき

○ 夕されはなくね涼しきすゝむしの

○ くさむらよりそ秋は來にける

世語りに今ものこれはことさらに

よし野よく見よ花ばかりかは

すみわぶるわかむくらふも春の來て

來つゝ鶯なかぬ日そなき

筒井筒あつゝの底にやとる月の

みちてるかげを誰かくむべき

女郎花多かる野路をわけゆけば

月のかつら男面ふせなる

淡路しまこきゆく舟の眞帆の上に

月はおぼろの春の夕くれ

雪ふかし君よとゞまれいざこよひ

柴折りたきてかたりくらさむ

一つ二つ三つ四つ五つみやこ鳥

須田の川原にむれや鳴くらむ

梅椿桃や杏とかぞふれど

花は櫻に及ばざりけり

一日飼へば三年の恩を知るとかや

犬は人にもまさるものかな

梅は蒲田さくらは隅田もゝは野田

花さくころに君とたつねん

○ 武藏野はまだ矢さけびの聞ゆなり

尾花の末に小夜あらしゝて

○ みよし野のみねよりつゝく白雲は

むかしながらの山さくらかな

○ おもしろくふしつけて鳴く蛙こそ

われより歌はたくみなりけり

○ おとゝひもきのふもけふもしくれして

あすかの山やもみちそむらん

花ちりて春もくれゆくわか庵に

わすれかねてや月の問來る

○ 吹きおろす大内山の時風に

なひかぬ草も木もなかりけり

○ 世の人にしられぬ奥の花見んと

雲ふみわくるみよしのゝ山

○ たのみなくはかなき夢もあるかひは

なき父母にまみえもそする

○ 見ず聞かず言はぬ思ひにすごしてん

人のそしりはさもあらばあれ

かたるへき人しなればはしゐして

くひな聞きくふかす短夜

すゝしくも安房の海つらおとたてゝ

夕たちわたるあはの海つら

さえかへり風のまにく散る花の

吹雪にくるゝ春の山さと

山住の秋の日影はうすけれど

軒のもみちぞ濃染めなりける

露しげき稻葉にうつる月ゆれて

玉とちりけん風のすゝしさ

君か家の苔の山の井汲みあげて

さすがに深きこゝろをぞしる

秋草の花さく野邊をふみわけて

聞くやすゝむしまつむしのこゑ

むさし野のむかしを今もしのばれて

ならば軒端にうづらなくなり

たゆみなく軒に巣つくるさゝかには

わかおこたりをいさめけるかな

蜜つくる蜂のことくにつとめなば

いかなるわざのならさらめやも

○ ありなれの水もさかさにながるまで

かけしねがひはとけじとぞおもふ

○ とくおきてまなびのみちをはげむへし

おこたる人のあさねせるまに

○ はれたりとおもふ間もなくしくれして

かへらん君にかさをかさばや

○ うれしくも軒の葎のかれはて

くまなくはれし冬の夜の月

○ わかき日になすへきわさをおこたりて

老の夜なべにいとなむそうし

○ いとまあらばとくきて見ませわかやとの

おる木のさくらちりはてぬまに

○ 玉にきずありとばかりにをしめども

みがかばもとのたからとそなる

○ たまかはのつゝみの花ははやくとも

かすみの丘にひばりなくなり

○ おるぬとも身にいたつきのなかりせは

世にながらへしかひのかきりそ

○ 花のみか月もよしのゝ山おくに

わかおくつきはこゝとさためむ

○ さかしまにありなれ川も流れなむ

よきはあしきに立かはる世そ

○ 花のころ空はおほかたくもりにて

けふもひねもす春雨そふる

○ 世のうさをかたらぬ宿のしるしにや

かきねにさけるくちなしの花

氷よりかたくむすひしわかねがひ

○ 朝日の宮にかけてときてむ

○ えみしらがさかわさは猶やめもあへす

○ 今も神風ふきおこしてよ

○ 蚊遣火の烟に月をくもらせて

○ 木蔭しつかにくるゝ宿かな

○ わすれ草うえしかひこそなかりけれ

○ また夜もすからものおもふ身は

○ 袖の上にちるや櫻の花ふゝき

○ はらふもさむし春の夕くれ

しきしまの道やあれなむとかまもて

うはらからたちかりはらいてよ

青柳の枝にかゝれる宵月の

影そ流るゝ春のたま川

露しけきむくらの宿は月ふけて

秋そ身にしむすゝむしのこゑ

月見んと尾花の袖にまねかれて

ゆけともつきぬ秋のむさし野

尾花ちるあら野の露をいのちにて

わぶは狸とわか身なりけり

ながめせはかもの川そこ水まして

つるのはきさえつぎわたるへき

われ死なはこゑふりたてゝなけよなけ

やぶの鶯野邊の鈴むし

黄に咲かは花をこかねとあやまりて

朝な夕なに蝶のむれ来る

みちのくの末のまつ山なみ越さむ

みそかに月のいつる世なれは

この秋はいとゝあはれにむしのねを

きゝあきたりな深草のさと

○

とさゝねとたからしなくはぬす人も

あなとりはてゝなに来るへき

○

いにしへの人のをしえそいつはらね

暑さ寒さも彼岸までとは

○

むさしのも今は家居をたちこめて

みやこにつゝくちまたとそなる

○

世の中をいつも深山とおもひなは

都大路そ住みよかるへき

○

君ならて誰か汲まなむわか宿の

ふかき井筒の苔の下水

○

ひとしきりふりてのゝちの涼しさは

みそきにまさる夕立の雨

○

日の本の春風ふかばことくにの

しこの草木もふしなひくべき

○

いくたひかたえけむいとをくりかへし

網の巢つくる軒のさゝかに

○

末つゐに石にあなをもとほすへし

軒の雨たりおとたえすして

くちなしも耳なし草もおゐたれば

よのうきことはさもあらはあれ

何事も世におくれたるわが宿に

春をも待たて梅やさくらむ

朝なきに遠くかもめのこゑこめて

かすみたよふ春の海つら

すみの江の神にたのみしかひあれや

いつしか君にあふのまつはら

秋たけて風ふきさそふむさし野は

かたみにちるや尾花葛花

いたつらになすかひもなく世にふるは

雪にはあらでわか身なりけり

をしめともことはけふをかきりそと

きくもかなしき山寺のかね

花さけとけふもふりしく春雨に

やがて吹雪とちるさくらかな

花さかは深山も人のおとつれて

つゐにうきよをのかれさりけり

○ さひしきは秋かとおもふ古寺の

○ 花ちる雨に春くれんとす

○ 花はちり鳥のねさへもたえたりぬ

○ 春はいつこにいつかへりけむ

○ ねやのとをたゞくゝるなにうたゞねの

○ 夢路もまよふさみたれの空

○ 我か袖にかけし燕のひちりこも

○ 春のなこりと花の香そする

○ なには江やあしかり舟のむすふゆめの

みしかきほとにあくる夜の月

○ 鹿のねもみちも雲も柴舟に

○ のせて掉さす秋のきそ川

○ 月影にうつやきぬたのこゑさえて

○ ねられぬ秋の夜そふけにける

○ みゝしるも聞けとはかりに聲たかく

○ 梅さく窓にうくゑすのなく

○ あつふすまこほれるほとにさむけれは

○ おきいでかたきねやのあかつき

いとまあらはとく来て見ませわか宿の

おる木のさくらちりはてぬまに

毛利元就

利鎌もてうばらかりそけすめらきに

つかふる道を君はひらきつ

楠正成

とゝめなん臣のかゝみとみなと川

むかしながらにすみぞなかるゝ

大石良雄

大石もくたけてこそは後の世に

てらす光そ玉にまされる

西行

たかしてふ富士のたかねもしかさらん

世にぬき出たる君か心は

安倍仲麿

松浦かた波風なくばたち歸り

なれし三笠の月を見てまし

菅原道真

ありし名の後の世までもきこゆるは

香くはし道におりたちし君

調伊企儼

とらはれてあをのゝしり死ぬるまで

やまところろのみさをかしこし

北條時宗

つくしがたあまたもぐりのあたふねは

いかにはらはん君なかりせば

源義經

海山に仇きりふせし劍太刀

衣かはらにいかて沈まむ

豊臣秀吉

もよとせのいのちありせは君こそは

からも蒙古もわか御國なれ

高山正之

數おほく山はあれともたかやまの

高きに及ふ山はいつれそ

高杉東行

松はあれと檜はあれど高杉に

高さくらべんひと木だになし

清水宗治

しからみと身をばふちせにすてしより

世の波風もしづまりにけり

草刈重繼

眞柴垣たかくかゝりし大ひさご

射落しけるそ君はますらを

久坂通武

大君の邊にこそ死なめとこゝろさし

御楯のまこと世々に朽ちせじ

來島政久

大内山てる日にぬれきぬ干さんとて

あはれ都に屍埋めし

大江廣元

東路の岩根きりわけもよのふの

臣たる道を君は教へし

櫻尾局

もりのおくにおひしなてしこからさじと

涙の露ぞ命なりける

登 和

おやとつまはらからのあたをいくとせか

たづねうちしは聞くもいさまし

高橋喜久

ものゝふも及はさりけりゑみしらを

とりてにたちてのゝしりつくす

東京四季今様歌 春

霞のせきより見わたせは、今をさかりの春けしき、櫻の雲にうつもれて、

花のみやことなりにけり。

同 夏

うきをしのふの岡の森、しけれる梢青葉して、あはれふりしくさみたれに、

夕くれなのるほとゝきす。

同 秋

秋は尾花のひろを原、ころもかたしきかりねせん、露のなさけにきりくす、

鳴くねふけゆく月の影。

同 冬

けさもすみだのふる雪に、あしま棹さすゆきみ舟、渚にすだくおしかもの、

うきねのゆめやさむからむ。

○

和田のみさきの夕なぎに、あはんあさ路と眞帆ひけば、鹽屋の烟なびけども、
こなで舞子はまつばかり。

○

生田の杜のほとゝぎす、なきてぞわたるみなと川、むこの山風おつなべに、
花たちばなのかほるなり。

○

夕たちはれし夏の宵に、庭の木の間を月もれて、むしなく蔭も露しげく、
身にしむ風こそすゝしけれ。

○

品川沖の海苔しばに、むらさきたつや春かすみ、小舟こぎゆく海士の子が、
かもめにつれてうたふなり。

○ すめらみくにの日のみはた、旗の手わたる神風に、みいづかしこみあめがした
なびかぬくまこそなかりけれ。

○ 露にきほひて朝顔の、咲くやむらさきくさくさの、日毎に見する花のみか、
世の榮えしもかくこそあらめ。

○ 秋のあら野を夜ゆけは、遠き砧の音もさえて、まねく尾花の衣手に、
月のなみだそしくれける。

○ 目黒しぶやの山すまゐ、庭の落葉は雪深し、軒のかけひも音たえて、夜半の
夢路や凍るらん。

柳外漁莊俳句草

○ 池水のくろむも雪のあしたかな

○ こゝろよく春風に散る山さくら

○ 死生命ありと言ふも薬の匙如減

○ 楳たきて昔かたりになみた哉

○ 土くれの化けそこなひし人形市

○ 蛛の巢にかけしなさけや花吹雪

こゝろなき身にしむ花のあらしかな
 ○
 もみち散る秋をなこりの夕しくれ
 ○
 わか世とて軒のへちまのひるねかな
 ○
 夕立もわたりかねしか大井川
 ○
 堪えかねて案山子も遠矢はなちけり
 ○
 からき世のわたりや蓼の花さかり
 ○
 月ふけて蛙のうたを聞く夜かな

明月もころかり出たり團子坂
 ○
 のつそりとのぞくは誰か窓の月
 ○
 あなとりて盗人も來ぬ我家かな
 ○
 花の雨四月八日や灌佛會
 ○
 信心もいつれ後光のちからかな
 ○
 涼しさや浪間ふけゆく島の月
 ○
 わがねごと芭蕉も知らぬ名句かな

葉さくらや念佛たかき尼法師
 〇 〇
 かたつむり百尺竿頭に一步をすゝめたり
 〇 〇
 君は花われは夜ふけて月見かな
 〇 〇
 どこにゆくも家を忘れぬかたつぶり
 〇 〇
 闇の夜に盲法師のひとり旅
 〇 〇
 草わけてわぶや狸の古すまゐ
 〇 〇
 糸切らは何處までゆくか奴風

やかてゆくさきは地こくか極らくか
 〇 〇
 鎖せとも窓よりのそく夜半の月
 〇 〇
 長きものにまかれてのびし蛇かつら
 〇 〇
 さくもよしちるも吉野の山さくら
 〇 〇
 寒空や富士もいたゝく白頭巾
 〇 〇
 さして行くかさ戸あたりや夕しくれ
 〇 〇
 西行の墓をうつむる落花かな

○ 加茂川を足つぎわたる春の雨
 ○ 朝顔やゆるさは垣のそとまても
 ○ 托鉢となるや閻魔も地藏顔
 ○ 白馬ののれんにちるや夕もみぢ
 ○ 初午に客をもてなすいなりすし
 ○ 炭かまの煙たゝせて夕すゝみ
 ○ 飛驒たくみのこせし峯の老木かな

○ 夕立や佛も鬼も催合傘
 ○ 昔かたり聞く夜はさびしきりくす
 ○ 極樂は西か東か南無阿彌陀佛
 ○ 秋ふけて矢走も瀬田も夕しくれ
 ○ 山寺の和尚もてなすたぬき蕎麥
 ○ 木佛に祈るりやくの後光かな
 ○ 夜塘水くむは癡人のみならず

赤土の狐にばけし稻荷山
 明月を道づれにして須磨の旅
 大黒の槌に木魚のひびきあり
 秋風に大名の庭も落葉かな
 鷺歩み牛行くほどに老ゐてけり
 錦干す都大路の秋のくれ
 はるさめに傘貸せ軒のぬれ燕

水ぬるむ渚や芹の二三寸
 錦ぬぎて山は緑のころも替
 事たらぬ世とてかげたる月見哉
 尾花さく野や一ぱいにむしの聲
 闇の夜をさしてぞわたる鶺鴒舟
 菜の花のなかに胡蝶の座禪かな
 堪忍の足踏見せる金魚賣